
魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

まーしゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

【NZコード】

N6819M

【作者名】

まーしゅ

【あらすじ】

地球、日本、海鳴市。

「愛情」を忘れた少年がある日ストロギア事件に巻き込まれる時、もうひとつのお話が始まる。

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

小説執筆初心者であるため、違和感ある展開など多いと思います。

ですが、完結を目指して頑張りたいと思つております。
どうか、よろしくお願ひします。

又、「男の娘」要素を含みます。 苦手な方は「」注意を。

キャラクター崩壊も含みます。

特にフェイント、なのはが好きな方は「」注意をお願いします。

当小説では、基本的に特別編扱いとなります。クロスしていただける方を募集しております。

なのはの二次創作小説のオリジナルキャラクターさんならどんな方でも大歓迎です。

お気軽にどうぞ。というかよろしくお願ひします、はい。

プロローグ（前書き）

さて、結局書き始めてしました。

自分の思ったことを文にするのは楽しいですが、大変不安でもあります。

もし変な方向に走り出したら感想などで注意していただけないと幸いです。

では、これからよろしくお願いしますっ！

プロローグ

その少年に欠落した何かがあるとするならば、それは「感情」「 」。

少年、姫宮 遥は私立聖祥大附属小学校に通つ小学3年生であるが、幼くして、おとなしくする事を覚えた。

両親は共働きで、実際の所、子供にはあまりかまつていられなかつた。

だから、少年は、おとなしく、いい子にすることを覚えたのだ。

帰つて来たら愛情を受けらるると信じて。

しかし、いつのまにかそれが当たり前になつた時、親子の繋がりは薄れてしまつた。

そんなことがあって、彼から感情はいつのまにか抜け落ちてしまつていた。

このお話は、魔法との出会いが再び少年に心を灯すお話。

プロローグ（後書き）

凄く・・・短いです・・・
携帯からの投稿は大変ですね。

以上がプロローグとなります。

シリアル？いいえ、中身はコミカルなお話にする予定ですよ？（笑）

次回から本編スタートとなります。

主人公の設定については、次回以降の本文中で書いていけたらなあ
と思いますが、やっぱり設定を纏めたページは必要なのかなとか思
いつつ。

次投稿は出来るだけ早くできるよう頑張ります。

駄文を読んでいただき、ありがとうございます、お疲れさまでした、
もしよろしければ、次回以降もよろしくお願いします。

出合い（前書き）

さて、初投稿での緊張も落ち着いてきましたので、次話投稿です。
せめてどんな作品か隠すでも分かるくらいには書かないと不安です、
はい。
では、どうぞ。

出会い

はじめは、おせつかいな人だと思った。

その日は、たまたま外が晴れていて、お昼休み、食べる所に悩んだが、折角だからとお弁当を持って屋上で食べることにしてみた。

別に友達などいなかつたので、どこでもよかつたのだ。

屋上の片隅に設置されていたベンチのひとつを陣取り、お弁当の包みを開いた。

今日は自分で作ってきたため、なんだか歪なおかずやご飯がつまっているのだが、食べる分には問題ないかなあとか思いつつ、食べようとした、その時だった。

「ねえ、ひとり？ 良かったら、私たちと一緒に食べない？」

そう声をかけてきたひとりの少女。

……………これが、僕と彼女の出会いだった。

お昼休み。

私たちには今日も屋上にお昼ご飯を食べに来ていたのでした。

でも、いつも私たちが使っているベンチには既に先客がいました。
その姿にはなんだか見覚えがあつて・・・

「あれ・・・？姫宮ひかる？」

「姫宮は男よ？ なのさ」

「あはは、確かに分かりにくいやねえ」

そうでした。姫宮くんは男の子でした。
その筈なのにとても可愛い外見でひかるやくて、なんだか、ついや
ましかつたり・・・じゃなくて。

「ひとり・・・なのかなあ？」

折角のお昼ご飯なのにひとりじや寂しくないのかなあ？

「あのね、アリサちゃん、すずかわちゃん。」

「なによ？」

「どうしたの？」

「折角だから姫宮くんも誘つてみない？」

「あたしは別に構わないけど・・・」

「じゃあ、ちよつと行つてくるね」

やうして、私は姫宮くんのもとに行き、

「ねえ、ひとり？ 良かつたら、私たちと一緒に食べない？」

-----声を、かけたのでした。

遙 side

特に断る理由もなく、一緒に食べること。

まずは、自己紹介。

同じクラスなんだけど、話したことなかったから。

「ええと、僕は姫宮 遙。ええと、あなたたちは？」

「私は高町なのは、よろしくね。」

「あたしはアリサ・パーニングス。アリサでいいわよ?」

「私は円村すずか。よろしく……お願いします」

「よろしく、高町も「なのは、でいいよ?」……なのはさん、アリサさん、円村さん「わ、私も……すずかさん。」

それから、他愛のない話。

「いつも話すのって何年ぶりだろ?……

「せういえば、遙はいつもひとりだけをみじくないの?」

アリサさんの問い。

「友達……いないから。もう慣れたから大丈夫かな?」

「わ、そなんだ……」

しょんぼりしてしまつすかさん。

そんなとせ、なのはさんが、あつーと顔を輝かせた。

「じゃあ、明日も4人で食べようよー。」

「それ、いいわね。遙は大丈夫?」

「別に大丈夫だけど……」

「そつか、じゃあ決まりっ!」

そう言つて笑うなのはさんに、つられて笑顔になるアリサさんに対する
すかさん。

つい僕も笑っちゃったんだけど……

「　　・・・・・」

黙り込んでしまいました。

「ど、どうしたの? 僕、何か変なこと……」

「い、いや、そういう訳ないで」

「遙、本当に男?」

失礼な。

「可愛くでびつくつしちゃって、つい……」

「う、昔からよく言われているけど、やっぱり複雑な気分だなあ。
でも。

「ふふっ」

「元やわつー?どうしたの?」

「いや、こんなに楽しいの久し振りだなって思つて」

思わず吹き出しちゃったけど。

そう、同じ年の人と他愛のない話しきしたのもこんなに笑つたのも
久しぶりで。

なんだか、心が満たされるような気がした。

-----3人とも複雑そうな表情だったのは気にしないことにした。

出合い（後書き）

こんな文に1時間半、だと・・・?

やはり駄文です。

全然お話進んできませんね。

ちなみに、時系列はユーノくんを動物病院に預けた日の翌日です。
多少ずれていく所は一次創作ってことで（こら

主人公はあまり戦えない予定ではあるんですが、（魔力はある
でも平均からみたらかなり高水準になるんだと思います。

はじめて姫富くんが男の娘な表現が入りましたが、完全に私の趣味
です。
まあ、あまり暴走しない程度に頑張ります。

何故か後書きはすらすら進むことに疑問を覚えつつ。

お読みいただいてありがとうございました、お疲れさまでした。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）（前書き）

まだまだ序盤なのですが必要かなあとおもつたので（既にキャラが
ぶれてるの）（まてやこり

書いてみます。

ネタバレについては問題ない程度に。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）

姫宮 遥 ひめみや はるか

9歳 男（勘違い率はとても高い）

9歳の中ではとても低い身長と体重で、髪は色素が薄めの茶髪を腰くらいまで伸ばしている。本人はただ伸ばしているだけなのだが、それが女の子っぽく見えるのに拍車をかけている。顔も体格相応に童顔で、小学校の制服さえ着ていなければ小学1年生の女の子くらいに見える。

性格は基本的に無関心で静か。 本当はとても素直で、物事を断れなくて、どんなに辛くても恥ずかしくてもやろうとする。表情もあまり変わらないが、それは昔からの癖のよつなもので、面白いと思えば笑うし、嫌だと思えば嫌がる。そう思わないことが多いのではあるが。

話し方は基本的には敬語だが、信頼出来ると思ったらある程度は碎ける。

学校の成績はなんでも高水準。

幼い頃から両親は共働きで帰つてこない日もある。

だから自分はいいこにしてようと大人しく静かになつたのだが、いつのまにか、友人や両親の温かさや、甘える事を忘れてしまつたようだ。

両親が家にいな時は基本的に家事はすべて自分でやるため、家事は得意で、料理も至らない所もあるがそこそこ。

クラスはなのは達と同じクラスだが、基本的にはひとり。なのは達と友達になつてからは一緒に行動するが、「仲良し4人娘」と影ながら呼ばれるようになる。

魔法での戦い方は、主にユーノから習つたりした拘束系の魔法を用いるが、射撃魔法も使えるし、魔力スフィアの生成も出来る。

魔力量はなのはやフェイトに及ばないものの、一般的には高い方に入る。

拘束系や補助系の魔法と魔力の運用についてはユーノから驚かれるレベルのものがあり、鞭型のストレージデバイス・シールウイップと共に、相手を拘束する戦い方をする。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）（後書き）

ぬおお、眠にぞおお・・・！（午前4時

眠いで誤字脱字が心配ですが、とりあえず主人公の設定です。

では、読んでいただきありがとうございました、お疲れさまでした。

8月2日、魔法での戦い方にについて追加しました。

非口常ヒルダルガワ（前書き）

さて、今回から魔法とこんなにちわなことになります。
「都合主義」が入ります。力量不足でして・・・。
では、どうぞ。

非日常といふこと

放課後。

あの後、3人と血口紹介や軽い身の上話などをした。
午後の授業の休み時間にも話をしてみたりもした。

-----。111まで学校で誰かと話したのは初めてかも
しれない。

でも、すいべ、楽しい、嬉しい。

そう話したら、3人は嬉しそうにしてくれた。

じゃあ明日も、明後日も、いっぱい話そう、ってなのはさんが言ってくれた。

昨日までとはきっと違ひ日々。
でも嫌だとは思わない。

学校が楽しいと思ったことはなかつたけれど、少なくとも、今、とても楽しい。

そんなことを考えながら僕はなのはさん達と家に帰つていた。

「それにしてもアンタつていいつて今までひとりでいたわけ?」

「ひとり、寂しくないの?」

アリサさんとすずかさんからの問い合わせ。

「あまり寂しいとは思ってなかつたよ。ひとりでいいやつで、そつと思つてたから。」「

今はそつは思わないんだけどね。と付け足すと、3人は満足そうに笑つてくれた。

「じゃあ、僕はこつちだから、じゃあね・・・ええと。また明日、なのかな?」

慣れないことに言葉が詰まる。

「うん!」

「また明日ねー」

「うん、また明日」

3人と別れ、僕は別の方向から家まで歩く。
なんだか長いと思っていた帰り道も、3人と話していたらあまり長く感じなかつた。

家の玄関。

鞄から鍵を取り出す。

ガチャツ。

「ただいまー。」

「お、お帰り、遙。」

「今日は遅かったのね？」

お父さんとお母さん。
今日は帰っていたんだ。

「今日はもうお仕事はないの？」

「遙が学校にいってすぐくらいに帰ってきたんだが、今日は夜こ
またお仕事かな。」

「そういえば遙、今日は随分とうれしそうなのね？」

流石にお見通しだつたらしく。

今日あつたことを話すと2人とも驚いたけど嬉しそうに笑い、

「やうかやうか、よかつた。」

「不安だったのよ、ずっとお友達作れないんじゃなかつて。」

「やうやう、おやつあるわよ～早く着替えてこいっしゃー。」

「はーいっ」

そうして僕は部屋に行く。

-----なのは達と話してから、なんだかお父さんとお母さんと話すのも楽しくなった気がした。

お父さんside

時は移つて夜。

それにしても、あの遙に友達か。

ずっと面倒見られなくて、塞ぎこんじやつてたみたいだつたけど、

とりあえず一安心かなあ。

今はリビングで妻と一人でテレビを見ている。

ずっとミッドのテレビを見ていたから、なんだか久し振りに見る地
球のテレビ番組は新鮮に感じる。

夜になつたらまた2人でミッドに戻らなくてはならない。

遙には悪いけど、仕事なんだ。

僕らは平和を守るために頑張らなくてはいけない。

今日は、息子のため、と上司からの計らいで少しだけ家にいられたけれど、また長くなりそうだが。

そんなことを考えていたら、妻が

「そういえば、気がついた？遙の潜在魔力、結構高いのよ。」

「ああ、気がついてる。で、それがどうしたんだ？」

「つふふ、実はね」

「そう言って一本の刀身のない剣のようなものをつてつまおー？」

「それはストレージデバイスじゃないか！？ どうして？」

「どの世界でも魔法での事件は起きるのよ？だからもしものためにつて。次の仕事が終わったら、しばらくお休みになる。だから、その時に渡そうかな、って思うんだけど、せっかくだから今のうちに渡して置こうかなって。」

「あの子にも、同じ道を歩ませる」とになるのかな・・・。

「それはあの子が決める」とよへ。

そんなとき、2人の持っている端末に通信が入った。

「・・・もう、時間がないようだな。」

「そうね。私は、遙にまた出かけて来るって伝えてくるから、先行つてて。」

そうして、僕は、家を出た。

遙 *side*

お母さんが部屋にきた。

また、ふたりともお仕事に出かけること。

今度は帰るのに遅れるそうだ。

すこし寂しい、かな。

「あと、これ。」

「これは？」

「お守り代わりに持つてなさい。きっと力になるから。」

渡されたのは刀身のない剣のよつなもの。変わったお守りだと想つ。

「あつがとへ、お母さん。」

「じゃ、歸つてくわね。いい子にしとるのよ?」

「うそー。」

やつしてお母さんは出て行った。

夜。

今日はなんだか不思議な夜だ。

幼い男の子の声のようなものが聞こえたり、なんだか不思議な感覚に襲われたり。

・・・誰かに危機が迫つてこるよつな。

タゴはんを食べ終え、気になるので出かけてみることにする。こんな夜に出かけるのはきっと「いい子」じゃないのかもしれない。でも、なんだか嫌な予感がする。

お母さんから貰つたお守りを片手に持つて、僕は不思議な感覚のする方に走り出した。

「な・・・なんだあれ？」

「じあえず感覚を便りに走つてみたらなのはさんがいた。
・・・変な怪物のようなものと一緒に。」

なのはさんはなんだか変わつた服装をして、杖のよつなものを持つて怪物に立ち向かつてゐる。

しかしながらかぎこちなくて、なんだか怖くて、僕は走り出した。

「・・・え？」

おかしい。

怪物に近づいたらなんだかお守りが光つてしなる鞭が現れた。
これ、鞭だつたんだ。

力を入れてみると、水色に発光する。

・・・これなら、怪物と戦える。

対等に戦えなくても、なのはさんの手助けになるんだ！

なのは side

私は初めての魔法でユーノくんを助けるために戦つていたのですが、怪物は思つていた以上に強くて、私は吹き飛ばされてしまいました。

「あ、うー。」

迫る怪物。 . . . 私、死んじゃうのかな？

「なのはさくさー！」

「・・・え？」

聞こえたのは新しいお友達になれた、冷たくも、やせこい声。
遙くんの声。

ビシィツー！

声の聞こえた方向には、黒い服 - - - きつと私と同じく、バリアジ
ヤケットをその身に纏つた遙くんがいたのでした。

よかつた、間に合つたよつだ。

遙 side

鞭を怪物に向けて振り、発光した、どうやら伸縮性のある鞭は怪物に命中し、動きを止めることが出来た。

「今だなのは、封印をつ！」

「う、うんっ…」

聞こえたのはさつき膚げに聞こえた少年の声。
そうか、このフュレットが…。

その後。

無事、封印とやらが済んだ宝石がなのはさんの杖に吸い込まれていった後、一度現場から離れ、近くの公園についた後、お互い情報交換をした…と言つても、なのはさんとフュレット…名前はユーノくんから、事情と、不思議な力について聞いた。

曰く、魔法は実在するさうだが、この世界、地球には魔力保持者は少ない。

曰く、僕となのはさんは高い魔力の素質を有している。

曰く、僕の鞭が突然出でたのはデバイス…お守りが高い魔力反応を観測した時に自動でセットアップされるように設定されていたから、とのこと。突然服装が変わって驚いたのは封印が済んだ後だつたが、それはバリアジャケットと呼ばれる防護服のようなものらしい。

曰く、この世界に散らばってしまったロストロギアと呼ばれる過去の危険な魔力を持つ遺産、「ジュエルシード」を集めるためにユー

ノくんは来たらしく。」その後、なのはの家に厄介になるやつだ。

「説明は以上かな。それにしても驚きました。魔力を持つ人が2人もいたなんて……」

「あんまり実感はないんだけどね……」

「いやははは……」

「それで、僕は、そのジュエルシード集めを手伝えばいいのですか？」

「……いいんですか？」

「あ、じゃあ私もっ！」

「困ってるんならほうつておけなことですよ。それに、お手伝いながらできるかなって。」

「私も嫌だつ！ がんばつて集めよう！」

「なのはさん、遙さん……」

「なのは、でいいよ？」

「あ、じゃあ僕も遙で。」

「あ、うん。改めてようじぐ、なのは、遙。」

こうして僕は今までとは違う、非日常の世界に足を踏み入れた。

非日常といひことひがわ（後書き）

お疲れ様でした。

色々といひ覚えでぼろぼろ&「都合的展開でさりげなく泣きやつです。

でも限界。

さて、主人公のデバイスですが、グフのアレを想像していただければいいかなあと。

後方から戦うので、折角なのでこんなデバイスに。
別にバインドでいいじゃんって思った人、前にで「・・・わわ、ごめんなさい、お願ひします、石はやめてくださいっ！」？

さて。

こんなところで書くのもアレですが、当小説ではクロスしていただける小説の執筆者さんを募集しています。

「特別編」扱いとして、他の作者さんのオリキャラさんと遊んでみたいな、とか遊ばれてみたいな、とか。

主な理由は、私のいろいろなキャラクターの描写練習だったたり、ただ単に楽しみたいだけだったり。（まてや

募集文は後であらすじにも書くつもりですが、もし大丈夫だよ、という方がおられましたら、感想にでも一報いただけたらな、とか。

以上、よろしくお願ひします。

駄文を読んでいただき、ありがとうございました、お疲れ様でした。

優くんと愛の逃避行（タイトルと中身はきっと異なります）（前書き）

このお話は a·r·i·s·h·i·a 様から許可を頂いて書かせてもらつたネタ回です。

優くんに関しましては、 a·r·i·s·h·i·a 様著「魔法少女リリカル…なんとか！」を読んでください。

とても面白いですよ！

あくまでこの回はネタです。

時系列をはじめ、登場人物など基本的には深く考えないでください。（ちょ
い。 ギャグ回にするなら一緒に出すしかないなって思つたんです（ま
てい

ちなみに、戦闘描写の練習、という個人的な課題も入つてます。

・・・簡略化されるんだとは思いますが（目逸らし
どうでもいいですが、モニタに向かいながらかつてなく緊張してい
ます（w
では、どうぞ！

優くんと愛の逃避行（タイトルと中身はきっと異なります）

さて、どうしてこうなった。

ここのは、うちの僕の部屋。

目の前には息が切れてぐったりしている優くん。

すこしき、さつきの事を振り返つてみよつ。

♪数分前・朝♪

さて、今日も朝の訓練と称して、魔法の練習をしていた。数日前、初めて魔法（といつても魔力を帯びた鞭を振るつただけなのだ）を使った後、なんとなく思った。
もし人前で魔力反応をおこして勝手にセットアップしたら？

うん、それは非常にまずい。

母さんよ、非常事態に対応しやすいとはいえ何て事を。

そんなことがあって、ユーノさんから基本を教えてもらつて封時結界の練習をしている。

セットアップ 結界発動がスムーズに出来ればそうバレたりしないだろうと思ったからだ。

魔法文化のない世界は大変だと思つ。

ちなみにのはさんとユーノさんは来ていない。

ほぼ一人暮らし状態になつてゐるうちならともかく、今は朝早い。たとえ休日であつても、朝早くから小さな女の子が出かけるといつ

のも、ということでお、あまり来ることは多くない。

ユーノさん一人で来てもいいのだが、フェレットが単独で行動するのはなんとなく目立つし、もし家族に見つかったら大変だ、とのことたつだ。

そんなことがあって訓練は1人で行っている。

まあ、教わりたければお昼過ぎにでもユーノくんに教わるう、うん。
ユーノさん曰く、「遙にはそこそここの魔力と補助系魔法の適正があるみたい」だそうだ。

魔力量はさんはさんには遠く及ばないみたいだが、

封時結界の他に、ほかの魔法も教わったが、なんだかとても難しい。いくつか発動は出来るようになつたが、とても残念なレベルである。

一方、なのはの方は順調に上手くなつてている。
く、悔しくなんか・・・ないんだから・・・

さておき。

今日の練習も終わり、家へ帰つているときに事件は起きた。

「待てーつ！」

「どーに逃げたって、匂いでわかるんだからっ！」

・・・なんだか物騒なことが聞こえたような気がしなくもないのだが、ひとり追いかけられているようだ。

言い方から、強盗やらひつたくりなのではないようだ。

匂いが分かるほど御厄介になつてゐる犯人なんていないだろう、うん。

遠くから見えるのだが、どうやら追いかけられているのは・・・あれ？優さん？

その優さんを数人の女の子達が追いかけている。

・・・遠くから見てもなんだかもの凄い速度のような気がする。

あと、纏う霧囲気も恐ろしい気がする。

追いかけているほうも追いかけられているほうも、魔力を保持しているようだ。

どうやらこの鞭は、人体などに保持されている魔力には反応してセットアップ、なんてことはないようだ。

あくまで魔法を使った時などの放出された魔力に反応するようだ。

さて、優さんは必死に逃げているが、ここは助けなくちゃいけないだろう。

・・・あ、優さんが物陰に隠れた。・・・よし。

僕は隠れた優さんを探している人たちに近づいていく。

「あの、すみません、どうしたんですか？」

話しかけてみる。

気がついたようで、僕の方を向いて

「ええと・・・銀髪で青い目の女の子みたいな男の子見ませんでし
た？」

「可愛らじくて凛々しくてカッコよくて……はう」

「私のお嬢さんー！」

「違うもん、私のだもん！」

・・・なんなんだこの人たち。

2人目からなんだかおかしい気がする。

「・・・ええと。 あっちの方に行きましたよ?」

「え、本当!? ありがとう!」

「待つてね、優つ!」

再びもの凄い速度で示した方向に走っていく女の子たち。
・・・ええと、匂いで分るんだつたっけか。
すぐに移動しなくちゃ。

冷静さを欠いているよううで助かった。

「出てきて大丈夫ですよ、優さん?」

「うわー!・・・って、遙? あれ、みんなは?」

「とりあえずあひに行つたよ。 すぐに離れないと。」

「うそ。ありがとう、じゃあなー。」

そつぱつて走つて行つたつある優さん。
でもじこか安全なところに行かなことすぐこわつもみたいな事にな
つちやうよね？

「あ、いや、ただ逃げるだけじゃすぐこまちわきみたいな事にな
つちやこますよ。」

「確かにわづだけど・・・。」

「と、言つわけで僕たちでに来てください。今日は誰もいませんし。」

「

「助かるけど・・・大丈夫なの？」

「うん、大丈夫大丈夫、近いし、行つー！」

そうじつて優くんの手をとつてすぐに走り出す。

幸い、走つている途中にあの子たちこは見つからなかつた・・・多
分。

時々遠くからただものじやない気配が感じ取られたが氣のせいだと
信じたい。

回想終了

「とりあえず、見つからなくてよかつたな・・・」

「そ、そうですね・・・。」

2人してぐつたり。

「ええと、それでさつきの人たちは誰だつたんですか？」

「ええと・・・その・・・友達・・・かな？」

「自信ないのですか」

「あつちからしたらそれ以上だと思われているのかも知れないが・・・」

「あはは・・・」

思わず苦笑してしまったが、おそらくそうだと思う。

・・・って。さつきは必死で走っていて考えていなかつたが。

「次、僕姿見られたら攻撃されるのかな・・・？」

「あいつら魔法で攻撃できるのもいるけど……大丈夫だよ……
多分」

2人で溜息をつく。

よくよく考えれば2人で手をつないで走っていたのだ。

もし見られていたら大変だつた。

「とりあえず、しばらくうちにいてください。の人たちが諦める
まで」

「うん、サンキュー、遙。」

流石に異常レベルな索敵能力を持つているとしても僅か数分でこの
家だ、なんて分かるようなことは……
そんなことを考えていたら、家のインターホンが鳴つた。

-----ピンポーン

「あ、ちょっと出でますね。」

「おう。……一応それ持つとけ」

指で鞭のデバイス……つべ、面倒くさい。今度名前付けよつ。
を示す優さん。

「や、流石に数分で家に押し掛ける、なんてことはないと思こます
が・・・」

「まあ、一応な。」

とりあえずデバイスを持つて「はーいっー」と返事しながら家の扉に向かう。

そして、扉を開けようとしたり。

ビュイイイインッ！

「・・・え？」

おかしい。

セットアップが始まった。

扉の覗き穴から外を窺つてみると

おかしいな。各自のデバイスを構えていらっしゃるやつらの女の子たちが。

「ええと・・・何故デバイスを構えていらっしゃるんです?」

思わず扉は閉めたまま聞いてみたが。

「あなたが優を攫つてこの家に閉じ込めているのは分かっています

！」

「監禁なんて、絶対に許さないんだからっ！」

「素直に開けないと……この扉……破壊します」

「んなつ！？ それは勘弁してください！」

愕然としている僕。

やばい。

相手は数人、こちらは1人。

実力差で覆せるような相手でもない。

・・・思わず、バリアジャケットを解除して優さんに異常を知らせるために部屋に向かって走り出す。

「・・・逃がさないっ！」

「うわああ、扉 ツ！？」

本当に扉を破壊されたっ！？

しかし、後悔している暇はない。
すぐに部屋に戻り、

「優さん、やばい、来ましたっ！」

「本当に来てたのかよっ！？」

窓を開く。

優さんと一緒に窓から屋根伝いに家から飛び降りる。両親に屋根から飛び降りやすい家にしてくれたことに感謝しつつ。

「見つけたっ！逃がさない！」

しかし、追いかけてきていた女の子が飛行魔法を発動させながらこちらに魔力弾を放つ・・・って嘘でしょ！？

「なんで普通に魔法使ってるんですかっ！？」

「関係ないもん！優を返せっ！」

「遙、セッタアップだ！ マジでやばい！」

「・・・わ、分かった！」

慌ててセッタアップし、飛行魔法を発動させた・・・んだけじ。

「流石に、まだ慣れてないから・・・！」

速度も遅くフラフラだった僕を見かねたのか、優さんは

「遙、しつかりつかまつていってくれよー。」

そう言つて僕を所謂お姫様だっこで抱えて速度を上げて飛行する。

「ー? な、あ、あーつ・・・ー。」

「優ここそなことをさせるなんて・・・ー。」

あれ?

途端に溢れ出る黒いオーラ。

「あのを優さん? わつきより状態が悪化してません?」

「こや、つこ・・・。」

とつあえず高速で飛来する攻撃を優さんに回避してもらいつつ時々魔力弾で反撃しながら（一発も当たらなかつたが、とこつか当たる気がしなかつた）逃げていたが、とつとつ追い込まれてしまつた。

「追い込まれたな・・・。」

「そつみみたい、ですね・・・。」

優さんから降りて地上に着地する。

「あー、数秒くらくなら足止め出来ると思こねます。今のうちに逃げて下さい。」

「で、でもそれじゃ遙が・・・」

「あはは、大丈夫ですよ。死にやしませんと思します。・・・短い間でしたが、今日は楽しかったです。」

ビリビリだよ、と優さんは苦笑しつつ。

「せつか・・・ありがと、じゃなあな！優！」

「はーー・・・よしーー」

たとえ数秒でも時間を稼いでみせるー。

そつ自分に言い聞かせてテバイスを構える。

「優がーー」

「やーーをしてーー」

襲い掛かってくる女の子達。

「一度でいい・当たれえええ！」

魔力弾を放つ。

難なく回避。なら！

魔力を捌いている隙に接近、鞭での捕縛を狙う。
あくまで僕の基本戦闘スタイルは捕縛である。

「そんな攻撃！」

そうですね、余裕で回避ですよね。

そもそも、相手は多数だ。相手が多いと逆に誰を狙えばいいのか
混乱してしまつ。

「反撃！」

相手からの反撃が来る。

多数の射撃魔法に・・・砲撃魔法！？

「そこは通してもいいます！」

「回避・・・・つわあつ！？」

バイング・・・！

私的怨念とか入ってるんじゃなかろうか。

「優を勝手に奪おうとした罪、償つてもううんだからっ！」

僕、男なんだけどなあ。そんなことを思いながら、迫る攻撃。
数秒、稼げたかな？
・・・

着弾する魔力弾と砲撃。

そして、僕の意識は途切れた。

・・・ - 時間にして、10秒。

良かった、2桁稼げたんだ。

優くんと愛の逃避行（タイトルと中身はきっと異なります）（後書き）

さて、どうしてこうなった。

最初に思つた言葉です。

戦闘描写なんてほとんどないじゃないか（「」）

書き終わった直後に後悔しました、というかします。

今から全部書き直して優ラバーズさんなしで書き直そうかしら。
しかしギャグ回、戦闘描写入りの話を描す、と最初に決めていた
ので、これで投稿つ！

まあ、ギャグはどこがそつなのかわからないような気がするし、戦
闘描写はお粗末ですけどねえ（田を大きく逸らす

・・・優さん、arishiaさん、本当にめんない（土下座
(ちーん

遙「優さんに関しては逃げるだけでしたしねえ」（所々焼け焦げて
ボロボロに

そうだよねえ。

ちなみに、優ラバーズな方々ですが、まだ原作で会つてない・・・
というか、顔わかつちゃつてもまづいのでこの小説では誰が誰だか
分らない感じになりました。

遙「あの人たち怖い・・・」

あははは・・・僕もarishiaさんの小説読んだるときたまに
そうおも（突然飛来した砲撃魔法に吹き飛ばされる

遥「作者ああああああつー!?

遥「と、いつわけで今回以上です。ariishiさん、優さん、本当にありがとうございました、そしてすみませんでした。・・・
作者、大丈夫かなあ・・・?」

もう1人の魔法少女（前書き）

さて、今回は少しお話が飛んでフェイト登場のあたりまで飛びます。漸く男の娘らしいイベントを起こせやつです（つよ

遙「起いねなくていいよー？」

聞こえない聞こえない。

ちなみに、細かい展開を始め、ノエルさんの口調とかつる覚えになつてます。

違つていたらごめんなさい・・・！
では、どうぞ。

もう1人の魔法少女

優さんとそのお友達たちが来たあの日から数日。僕となのはさんの魔法の腕も順調に上昇し、ジユエルシードも順調に封印していた。

「すずかさんの家に、ですか？」

「うん、そうだよ。今日の午後に。」

今は朝に魔法の自主的な練習をしてからなのはさんの家に遊びに行つていた。

高町家の若さや全員美形であることに驚いたが。

とりあえずお友達です、と言つたら歓迎してもらえた。
女の子だと思われていたのだが、男です、と言つたらすく驚かれた。

なのはさんのお兄ちゃんの恭也さんには睨まれてしまつたが、特に問題ない、と思われたのか、今は特に睨まれも警戒もされていない。

ジユエルシードの封印は、何度か経験したが、基本的に僕とユーノさんが動きを止めてなのはさんが攻撃、封印という形になった。

僕だって練習頑張つてのに一向に差が縮まらない気がするのは何故だらう。

ちょっとだけ悔しい。

さて、すずかさんの家か・・・

僕はまだ行ったことない。

恭也さんも来るらしい。

すずかさんのお姉ちゃんの戸村忍さんと付き合っているらしい。

「じゃあ、今日は練習やジュークエルシーー探しあは休み……かな?」

「うん、そうだね。あ、ユーノくんも行くからね?」

「あ、うん、分かった。」

ユーノさんはあれから高町家のペント、といつことになつてゐる。本人は不満そうではあるが露骨に嫌そうにはしていない。

「じゃあ僕は一度家に戻るね?流石にこの恰好で行くのは……」

「あはは……。」

そつ、僕の今の格好は動きやすい、といつことで上下ジャージだつたりする。

折角招いてもらつているのにこの恰好だと失礼な気がする。

「それじゃあ、また家でね?」

「うん、わかつた!」

数十分後

「さて……準備はこれで大丈夫……かな。」

一度家に帰った僕は着替えた後、あちこちで戦闘があつてもいいようにシールウィップ（この鞭に付けた名前だ）を入れた鞄に色々入れて準備した。

「さて、そろそろ時間かなあ。」

時計を見てみたらそろそろ高町家に行く頃合いだった。

今日はジュエルシードは見つからないといいな。
不謹慎だがそんなことを思いつつ、一度バスに乗るためなのはさん達に合流するために僕は高町家に向かつのだった。

・・・で無事僕らは月村家にたどり着いたのですが。

「凄く・・・大きいです」

「にやはは・・・私も最初は驚いたよ

そう。もの凄く大きい。

育ちがいいなとは思つていたが、流石に想定外だった。

インター ホンを押すと、「少しお待ちください」と声が聞こえ、すぐ扉が開いた。
中にいたのは・・・ええと。

「なのは様ですね。すずかお嬢様から話は聞いております・・・そちらの方は?」

「ええと、姫宮遙、です。」

「ああ、あなたがでしたか。失礼しました。私はノエルと申します。月村家に仕える者です。以後お見知り置きを」

「はー、じゅうじゅうよろしくお願ひします。」

「では、奥ですすかお嬢様とアリサ様がお待ちです。ビリビリ

そういうて奥へと案内してくれるノエルさん。
メイドさんもいたのか・・・！」

「あ、そういうえば遙くんは猫とか大丈夫？」

「大丈夫だけど、どうして？」

「すずかちゃんちつて、猫たくさん飼つてるから。苦手だと大変だからねえ」

「いやははと苦笑するなのはさん。

猫は嫌いではない。苦手でもないのだが・・・

奥へとついた後、扉を開けてもらうと、すずかさんとアリサさんが手招きをしていたのでそちらへ向かったのだが・・・

「やー！」

「ひあああつー?」

とびかかる猫さんズ。そして倒れる僕。

そう。何故だか分らないのだが、僕は動物に妙に懐かれる。たまに異常じやないかと思つほど。

「あわわ、遙くんっ！？」

「ちょ、ちょいと、大丈夫っ！？」

「え、ええっ！？」

慌ててなのはさん、アリサさん、すずかさんが助けに来てくれたが、なかなか猫は僕から離れようとしない。

「ちよ、ちよいと、そんなに強くしがみつかないで・・・や、そこは・・・りぬ、はうあ、ああ、ああんつ・・・！」

「うう、ひじてあつた・・・」

「ひせは、ひじてあつたよ。」

「私もびつくじやつたよ・・・」

「遙つてば、ずいぶんと猫になつかれるのね？」

なんとか引き離してもうつて今は椅子に座つてゐるのだが、相変わ

らず膝の上やら肩の上やらには猫が乗っかっている。

なんだかとても幸せそうにしているのだが、何故なのか僕には分らない。

引き離してもらつたとき、色々と乱れていたらしく、3人が顔を赤くして、「・・・遙つて本当に男の子?」とか言われたのは早急に忘れない記憶だつた。

「あはは、猫に限つた話じゃないんだけどね・・・。少し前の話だけど、鳩がたくさんいる公園に足を踏み入れた時はいきなり数十羽の鳩が飛びかかつて来て気がついたら公園の中央の噴水近くに押し倒されて鳩が群がつて人だかりが出来てた」

すこし疲れた顔をして僕が言つ。

忘れない記憶その2である。

鳩の集団の妙に高い集団能力には驚いた。

気がついてたら鳩が協力して公園の中央まで運ばれだし。

あの時集まつていて一部は写真撮影をしていた少し息の荒いお兄さんお姉さん達は少し怖かった。

「そ、それは・・・」

そして再び顔を赤くして顔を逸らしてしまつ3人。・・・あれ?

そんなこんなで楽しく話をしていたのだが。

ちなみにユーノさんはすずかさんの膝にいたりアリサさんの膝で遊ばれたりしていた。

ユーノさんも大変だ。

突然、ジュエルシードの反応を感じた。

(ジユエルシードー?)

(こんな時にー!)

(僕が先に行くーのはと遙は後から追いかけてー!)

念話で話してからコーコーくんが突然飛び出し、僕となのはさんがそれを追いかける。

「ちょ、ちょとーのは、遙ー!」

「ちょっとコーコーさん追いかけてー!」

「だ、だつたらなのはちゃん一人でも大丈夫じゃあ?」

「なんだか不安なんだもん! 転びそうだしー!」

「・・・・ああ」

「ど、どうして2人とも納得するのかなー? 遙くんも余計なー」と言わないでよー!」

少し涙目になってしまったのはちゃんと一緒にコーコーさんを追いかける。

・・・嘘を言つたつもりはないんだけれどなあ。

そんなこんなで反応のあった地点までたどりついたのだけれど。

「大きな・・・猫?」

「そ、そうだね・・・」

「ジューエルシードの暴走した魔力の影響、だね」

あんな大きな猫に飛びかかられたら・・・はうう／＼／＼
じやなくて。

「今回はユーノさんが封時結界お願いします!」

セットアップしつつユーノさんに言ひ。
結界魔法は勿論ユーノさんが上なので、ユーノさんが先に来た
時はユーノさんにお願いしている。

「うん、わかつた!」

「レイジングハート、セットアップ!」

「オーケー、マイマスター。セットアップ!」

レイジングハートさん(人格があるので僕はさん付けで呼んでいる)
から光が溢れ、なのはさんがバリアジャケットを身に纏い、杖とな
ったレイジングハートさんを持ち、猫の方に飛んで行くのだが・・・

その時、金色の魔力が巨大化した猫に襲いかかった。

「やああっ!?

猫からジュエルシードが飛び出し、猫は元の大きさに戻つて行き、驚いて逃げていった。

魔力弾を放つたのは金色の少女。

そのままジュエルシードの確保に向かつたが、それをなのはさんは阻止する。

予想外の出来事だったが、僕も魔力スファイアを形成しつつ増援を警戒しながら金の少女にゆっくり接近する。

こちらは対人戦は皆無だが、2人いれば行ける・・・か？

予想通り、高速で迫る魔力反応。

魔力反応に向けて魔力スファイアを発射しつつ、プロテクションを発動する。

高速で迫る・・・・・狼（狼と目視出来た）は、難なく魔力スファイアをかわし、直接攻撃でシールドに攻撃した。

「ん、アンタ、随分と冷静じゃないか

「そうでもないですよ。今緊張と恐怖でガタガタです」

「ふん、アンタたちにフェイトの邪魔はさせないよー」

「う・・・ぐ・・・！」

しかし、僕の脆いシールドでは限界があつたのか、大きくヒビが入るが漸くそこで攻撃は止まる。

1人では、時間稼ぎも無理か・・・？

しかし、やるなくてはならない！

僕は自分を言い聞かせ、シールウェイップで攻撃を仕掛ける。

「たああつー！」

「そんな攻撃つー！」

しかし、その攻撃はヒヨイヒヨイとかわされてしまう。

「そんな攻撃しかできないなら、今度はこっちから行くよー。」

大振りに右前足を振りかぶる。
よし、ここだつ！

前からコーノさんには魔法の高速展開と補助魔法に適正があると
われてきた。

「バインドつー！」

1部分のみだが、高速バインド展開ならこそこの自信がある。

「何いつー？」

右前足のみだが拘束できた。

「ぐうう、離せつー！」

少しだけだがなのはさんの方を見ると、金の少女に負けていた。

・・・あー、駄目だつたか。

「終わったみたい、ですね。」

そう言いつつバインドを解除する。

「なんだ、アタシの事を人質にでもすりゃいいのに」

「そんな悪役じみた事をしたくないですよ。そりゃあなた達から見たら僕らは悪役でしょうが」

「フン、アント面白い奴だね。名前は？」

「遙。姫富遙です。」

「アタシはアルフ。フェイトの使い魔さ。」

使い魔・・・後でユーノさんに聞いてみよう。

「まあ、感謝はしないけど。それじゃあね」

そう言つてアルフさんはフェイトをあと一緒にどこかに飛び去つてしまつた。

この先、ジュエルシードを封印するにはあの2人に競り勝たないと
いけないのか・・・。

なのはさんやユーノさんがいるから人数的には有利なんだけど、今
回は負けてしまった。

「ああ、強くならないといけないな・・・」

僕の呟きは誰に聞かれる」とも無く消えていった。

その後。

気絶したなのはさんは転んで頭をぶつけたことになり、僕が連れて帰った。

ちなみにユーノさんは僕の肩の上に乗っている。

今は、先程すずかさんのベッドに寝かされていたなのはさんの旦が覚めたので、恭也さんと3人（4人？）で帰っているのだが。

場が・・・重い・・・！

（また、ジュエルシードを集めようとしたらあの子と戦わなくちゃいけないのかな・・・？）

（やう、なるね・・・）

なのはさんからの念話にも相槌でしか返せないが、実際そうなのだから。

・・・・・今度は、強くなつて、なのはさんを支えられるくらい強くなつて・・・でも。

強くなつて、勝つた先に何があるのだろう。
あっちにも田的があるはずだ。それも、ロストロゴギアを必要とする
程の。

でも、話しあうとしても、先ずは強くならないと、話すことすら、
叶わないのだろう。

まずは、強くならう、話はそれからか・・・

フェイト side

戦闘は無事に終わり、今は私の部屋にいる。

今回は戦えなかつたけれど、私はあの黒いバリアジャケットを身に
纏つた女の子のことばかり考えていた。

「どうだつた？あの白いのは」

「え？ええと、魔力があるだけでそれ程でもなかつたよ。そっちの
黒い茶髪の女の子は？」

「アイツはなかなかできるみたいだつたよ。終始冷静だつたし、一
度バインドで捕らえられちゃつたしね」

「え？アルフが？」

意外だった。

魔力量は白い女の子より少ないはずだったのに・・・
私の中での子の興味が強くなっていた。

「そつか。それじゃライバルだね」

「あの時は油断してたけど次は負けないさ。フェイトのためにね」

「うん、ありがとう」

そうアルフが言ってくれたのが嬉しかった。
そうだ、私はジュエルシードを集めなくちゃいけないんだ。
- - - - 母さんのために。

ひとり人の魔法少女（後書き）

さて、思つたよつ遙の活躍する回でした。

まず、あれです。ゴーノくん、ごめんなさい。これ

次回は空氣にならなによつて、頑張ります、はー。

今回ば、前半は男の娘っぽく、後半はフラグを、ところどころセプトではあつたのですが、前半はただ微妙だつだけで後半のフラグもあまり目立たないですね・・・

遙「じやあ、なんであんなことさせたのやつ・・・

やつたから

遙「・・・（ぐすん

うわわ、泣かないでつ！？

そしておや、フロイトさんは多分やんでれます（まてや（やうこいつ）
ヒイトさんのが好きらしき）

では、今回は以上です。

読んでいただきや、ありがとうございました、お疲れさまでした。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・前編（前書き）

さて、このあたりから今まで以上にお話がおかしくなります（土日
に色々あつた

というかフェイトがおかしくなります。フェイト好きな人は逃げて
えええ！

冒頭部分読んで大丈夫だった人はもしかしたら私の同志かも知れな
いです（ちょ

主人公が話毎に強くなっているのは仕様です。
もう少し詳しく言うと私の趣味です。『めんなさい。

今回は前後編に分けようと思います。

到着、夜になるまでが前編の予定ではあります。

鮫島さんの口調は全然わからないので聞き流してください。
変なところがぽろぽろ出でてきますので○rn

では、どうぞ！

フェイト side

私は当面の相手となる3人の事を考えていた。
1人目に、あの白い子。
魔力量は驚異だけど、経験が足りないのか、今はさほど驚異ではない。

2人目・・・人かどうかはわからないけど、あのフェレットのようなネズミのような使い魔。
結界魔法が使えるみたい。

直接攻撃はしてくるか今のところはわからないけどこの子もそこまででも。

最後、3人目。あの茶髪の黒い子。

アルフと名乗りあつっていたようで、姫宮遙、と言うらしい。
魔力量は白い子に劣るようだけれど、魔法の行使も、動体視力や判断力も優れていた、つてアルフが言つてた。

しかしそれ以上に私の目を引いたのは・・・

あの長くて柔らかそうな茶髪に、この地域特有の黒くて大きな瞳、
守りたくなる白い肌、そして、私よりも華奢で小さい体。

そう、何を言いたいかつて言えば私はあの子に見惚れていた。

同性愛とかよく分らないけどお互いの了承を取れればきっと大丈夫だよね！

本当は、あの子と戦いたかった。

闘つて魔力ダメージでノックダウン、そのままお持ち帰り……つてそれは誘拐だよね。危ない危ない。

でも、相手の戦力を奪う、つてことにはなると思うの。今のところ一番の強敵となつるのはあの子だから。ある程度省略してそれをアルフに話したら、

「いいんじゃないか？ あまり褒められたやり方ではないけれどフュイトがいいつて言うんだつたら。」

と言つてくれた。いい使い魔を持って私は幸せだ。

そう遠くないいつか、きっと私はまたあの3人と戦うことになる。その日こそ、私はあの子を・・・うふふ・・・。

遙 side

ビクンッ！

ぶるぶると体が震える。どうしたんだろう。誰かが僕のことを噂しているのだろうか。でもそれ以上に感じる何かが・・・あまり深く考えないようじょり。

今日は、高町家、月村家、パニングス家の3家族合同で毎年恒例の温泉旅行に行くらしい。

僕も参加することになった。

なのはさん、すずかさん、アリサさんに誘われたので、別に断る理由もなかつたので、と言ひ訳だ。

あれから、朝の訓練にはなのはさん、コーノさんも参加するよつになり、なのはさんはさらに成長している。

僕はといえば、拘束魔法や飛行魔法、射撃魔法も練習している。

しかし射撃魔法をはじめ、攻撃系の魔法にあまり適性はないらしく、なのはさんには遠く及ばない。

ただ、コーノさんが言うには拘束系統の魔法には常人以上の成長を見せている、だそうだ。

そのうち拘束魔法で必殺技めいた何かが欲しいかもしない。

なのはさんが使えるようになった砲撃魔法、ディバインバスターのよつこ。

訓練の話は置いておこう。今日はお休みの日だ。

今は車に乗つて、海鳴温泉、という温泉宿に向かっている。車を数台用意していたようで、この車には、僕、なのはさん、アリサさん、すずかさんが乗っている。

運転手はパニングス家の使用人の鮫島さんだ。

余談だが、最初集まつたときに

「おはよう遙くん！ 今日も可愛いね！」とか

「遙は男の子でしょ？・・・まあ、可愛いけど・・・とか
「あはは・・・凄く可愛いよ・・・？」

など言われた時は流石に悲しくなった。

何故かクローゼットに女の子用のような服しか入れてくれない母さんをちょっとだけ恨んだりもした。

流石にスカートが入っていた時は母さんは僕の性別を分かつているのか不安に思えた。穿いていいけれど。

その後に慰めてくれたユーノさんがいつも以上にとても暖かい人と思えた。

3人は車の中でもとても元気に話していたが、僕はとくと、前日まで結構夜中まで魔法の練習やら何やらしていたので、凄く眠い。

僕は席の一一番隅のほうで陣取っていたので、発車してすぐに寝ることにした。・・・ふああ、お休みなさい・・・

なのはside

私たちとはアリサちゃんやすずかちゃんとお話をしていたのですが、

「・・・へー・・・・すー・・・・ンン」

お疲れなのか遙くんが寝ちゃつていました。

せっかく4人一緒に、つて思つちゃつたりもしていましたが、
私には

「遙くんの寝顔、可愛い・・・」

「うつの方方が重要なのでした。

「わああ、すつ『』へ可戀』・・・」

「本題に可戀にわね・・・本当に男なのかしづ。」

「うつとつあるすずかちやんになんだか疑いの田を向けているアリサ
ちゃん。

そして、アリサちゃんは何か思いついたのか、

「・・・脱がせてみる。」

そう言つたのでした・・・つて、ええええつー?

「や、それは流石にまことにアリサちゃんつー?」

「そ、そりだよーー遙くんがかわいそつだよー。」

思わず反対した私とすずかちやん。確かに『氣になるけど・・・。

「なりませござ、すずかお嬢様」

そんな時、鮫島さんに注意されてしましました。

「そんなことをしてしまっては、すずか様の仰る通り、かわい
そうだと思いますわ。そういう事は、お互いの了承を得てから・・・
・」

真顔で注意する鮫島さんに、「わ、分かったわよ、やめればいいん
でしょ?」とちよつと不満げなアリサちゃん。

・・・で、でも、お互いの了承を得てから服を脱がすつて・・・はう／＼／

「どうしたのなのは？顔赤いよ？」

「熱でもあるんじゃないかな？」

「い、いや、大丈夫だよーうん、元気元気ー。」

「な、ならいいんだけど・・・・・

「う、うん・・・・」

なんとかじまかせましたが、すっごく焦つちゃいました。

結局、また3人でお話したり、遙くんの寝顔を携帯電話で撮つたりして、楽しい車の中での時間が過ぎていったのでした。

遙 side

久し振りに気持ち寝ることが出来たのだが、どうやら到着したらしい。

なのはさん達に起「こ」されたので、起きたらなんだかみんな満足そうな顔をしていた。

一体何をしていたんだろう。

アリサさんが小声で宿での遙の寝起きがどうとか言っていたが、本

能が気にしてはいけないと悟ったのか、よく聞こえなかつた。

さて、宿に到着し、荷物を置いた後、最初に何するかと思っていたところ、みんなで温泉に行くそ�だったので、僕もついて行くことにした。

そして。

(は、遙、助けてっ!)

(そんなこと言われても・・・頑張ってはみるよ)

僕は何故か女湯に入れられそうになつたがなんとか断れた。しかし、人ではないユーノさんはどうか。

声から僕は男の子だと思っていたが、なのはと、声の聞いていない2人はそうは思つていなかつたようで、一緒に入ろうとかユーノさんと云つてゐる。

人ではないとは言え、流石に心細いだらうなあと思つたので僕は必死に3人に頼み込んでゐるのだが、やはり人數的にも分が悪い。

仕方がないので最後の手段を取つてみることにした。

「じゃあ一つ何か言つ」と聞くからさ?」

どうせ僕だし最後の手段とは言つてもあまり意味は・・・とは思つたが、その瞬間、確かに3人の時間は止まつた。

本当つ！？ともに凄い剣幕で迫つてくる3人に、僕はジュエルシード暴走の時やアルフさんが襲いかかってきたとき以上の恐怖を感じた。

「じゃ、じゃあさ、裸になつて！」

アリサさんがやうやくつて女湯の方に引っ張つて行く。・・・ってそれはマズいかりつー？

「だ、駄目だよアリサちゃん！・・・流石に、恥ずかしいよ・・・

「別に、お互ひのア承を得れればいいんでしょう？だから・・・

何の話なのだらう。

結局、アリサさんが折れて今夜アリサさんに渡された服を着て一緒に寝る、という事になつた。

余分に持つてきていったのかと聞いたら本当は夜にやろひと思つていたゲームの罰ゲーム用の服、らしい。

あまり恥ずかしくない服がいいな・・・。

交換条件が成立したので、今僕とコーノさんは一緒に男湯に入つている。

助かつたよ遙、と涙ながらに（表情はよく分らなかつたけど声がそんな感じだった）言われた時は、この後待ち受けることなどどうでもよく思えた。

人助けは気持ちがいい物のようだ。

お風呂には裸で入ったのだが、何故か他の入浴客に目を逸らされてしまい、どうしてだらうとユーノさんにてん話で聞いてみたらあはは、遥は可愛いからね、と言われた。

・・・むー。

お風呂から上ると、鮫島さん、「お嬢様からの言ことづけです。これを着てお待ちください」と服を渡された。これが罰ゲーム用に用意していたという服だろうか？

脱衣室に戻つて、片隅で着替えていると、（周りからの不穏な視線は気にしないことにした。なんだか怖い）「どうやらこれは女の子のアーネキャラクターの服だつた。

いかにも「魔法少女です！」っていう水色の衣装だった。

確かに朝にやつているアーネキャラクターの服装だつたと思つ。

膝上くらいまでの靴下に信じられないくらいに短いミニスカートに、スパッツ、所どころに可愛らしい装飾について、胸元に大きなリボンのついているシャツのようなものに、多分これで髪を結え、といふことなのか、長めのリボンが2本ある。

あとは、どことなくポップな鞭（だと思つ）があつた。

魔法少女の服だつたり鞭だつたり、なんだか仕組まれてるんじゃないかとか思つたが、それは無いだらうとその考えを振り払い、つ、つ、着替えを進めた。

・・・そこに入浴のために来たのだらうお兄さん、息を荒くしないで必死にカメラをのぞきこまないでください。なんだか怖いです。

着替え終わり、（あまり『感づ』となく着替えられたのは母さんのおかげではあるが何故かあまり嬉しくない）脱衣室から出ると、なのはさんたちが既に外で待っていて、

「わー、本当に着たんだつ！？」「

「うん、やっぱり似合つわね！」

「なんだか・・・羨ましいな・・・」

なのはさん、アリサさん、すずかさんが驚いていたり嬉しがっていたりなんだか羨ましそうにしていていた。

一緒に寝るまで、ということは「れを朝まで、ということとか・・・なんだか不安になつた僕だつた。

結局あの服のまま3人に囲まれながら部屋に戻つていた。

・・・うー、長い靴下穿いているとはいすーすーする・・・！一刻も早く部屋に戻つて籠りたい気分だつたが、急に声をかけられた。

「おい、そこ2人待ちな」

声をかけたのはなんだか背の大きいお姉さん。しかし、この感覚・・・どこかで・・・

（やあ、遙。アタシだよ、アルフだよ）

ああ、アルフさんか。

（で、アルフさん、どうしたんです？）

（そここの白いのにも言つておくよ。このままジコヘルシードを集め
るなら・・・2人ともガブツといくよ）

（そ、それって・・・）

（じゃあね、アタシが言いたいのはそれだけさ。それと遙。アンタ
はフェイトが随分と気に入つてゐみたいだよ。近いうちに一緒にな
れるかも知れないね？）

「お、と、他人のそら似だつたみたいだ。すまないね、それじゃ」

そう言つてアルフさんは去つて行つた。

・・・氣に入つてるつて・・・僕、話したことないはずなんだけど・
・・。

なのはさんは少し落ち込んだ表情を、すずかさんは困惑した表情を、
そしていきなり話かけてそら似だと言わされて立ち去られたアルフさ
んに腹を立てたのか、起こつているようだつた。

アルフさんの姿が見えなくなつてから、念話が飛んできた。

（ところで・・・その服はどうしたんだい？そういう服が好みなの
かい？）

慌てて否定したのは言つまでもなく。

そして夜。

その後の夕食等もある服ままだった。

恥ずかしくて少し泣いてしまっていたのだが、それが余計可愛く思えた、とかみんなは言っていた。
・・・なんでも。

部屋に布団を敷いて、（元々この部屋はなのはさん達3人の部屋だったのだが、アリサさんが事情を説明したら女将さんはすぐに4人の布団を敷いてくれた。融通の利くいい女将さんだとは思うが今は利かなくていいところでしたよ女将さん。）僕らはすぐに寝ることになった。

電気を消して、各自の布団に入つて寝る・・・のだが、

「えへへ～」

一番最初に寝ていたと思ったすずかさんが、みんなが寝たと思ったくらいに布団の中に入つてきていた。
意外と大胆な人なんですね・・・つて違つ違つ。

「ちよ、ちよっと、すずかさんつー!？」

2人を起こしちゃまずいので小声で。

抵抗するためにもがいてみるが全然びくともしない。

「遙くんは私の抱き枕なんだよ～」

「や、そうですか・・・」

抵抗を諦めた僕に嬉しそうにうなづきと頷くすずかさん。
将来怖い奥さんになりそうだ。

「・・・今、何考えてたの？」

突然ハイライトの消えた目の笑っていない笑顔でのぞきこまれる。

「な、なんでもないよっ！？」う、うん」

我ながら男らしくな」と思つてしまつたが仕方ないと思つ。怖いもん。

しばらくして、すずかさんが気持ちよさそうに寝たといひで、僕も寝ようかと思つた時。

「・・・ジユエルシード？」

ジユエルシードの反応を感じた。

慌てて寝て力が弱まっていたすずかさんから抜け出し、荷物からシールウィップを取り出していた時、なのはさんも気がついたのか目をこすつて起き上がつていた。

あの様子だと出るまではこしかかりそうだ。

念話でなのはさんとコーノさんに話しかける。

（なのはさん、先行つてます！コーノさんはなのはさんの事待つてください）

(ふあああ、うん、気をつけて)

(了解！・・・大丈夫、なのは？)

念話にまであぐびが入るのはさんに苦笑しつつ、僕は宿から飛び出し、セットアップをして、魔力反応のある所まで飛行魔法で飛んで行つた。

そこにいたのは・・・

「あ、一人で来てくれたんだ。手間が省けたかな、嬉しいなあ」

嬉しそうに、でもどこか寒気を感じる笑みを浮かべていたフェイトさんと、

「ジュエルシードも大切なんだけどねえ。アンタに恨みはないんだけど、悪いね」

そう言って突然僕に向かってトラップ式だと思われるバインドを発動させたアルフさんがいた。

なんだか予定が狂いました。
後編は短くなりそうですね（？）

原作つる覚えにつき、ビートなくなんかおかしいですね。ごめんなさい。

次回は明日投稿できたらいいなとか思つてあります。

・・・フェイドの性格はあんな感じです（実はああいつのが好み（田を逸らす

では、駄文を読んでいただきありがとうございました、お疲れ様でした。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・後編（前書き）

漸く更新出来ます・・・！

携帯での更新が怖くてずっと更新出来てなくて申し訳ないです、はい。

今回はたぶん短くなります・・・！

では、どうぞ！

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・後編

なのは side

嫌な予感がする。

先に行つたはずの遙くんの魔力が感じられず、念話も通じないのもしかしたらまだ闘つてないだけなのかもだけど・・・それでも、なんだか嫌な予感がするの。

急いで飛んで反応のあつた場所まで向かう。
お願い、無事でいて・・・！

「・・・見えた！・・・なのまつ！？」

私の肩で一緒に飛んでいたユーノくんの悲鳴なの。
その声に私は前方を見たの。

「遙・・・くん？」

そこには。

暴走の処理の済んだジュエルシリーズと、金の女の子とあの時の温泉のお姉さんと・・・
金の女の子の腕の中でぐつたりと意識の途切れていった遙くんがいた
の。

「どうして……遙くんを？」

白い子からの問いかけ。

そんなことは……決まっている。

「愛の力で『人質さ。人数の少ない状況では有利になるってことくらいは分かるだろ？』」

アルフに重ねられてしまった。……むー。

「ひ、人質っ！？遙くんは渡さないのっ！」

そういうてあちらはデバイスを構える。

こちらもデバイスを構える。

悪いけど、こちらも負けるわけにはいかない。

「賭けよう、ジュエルシードひとつづつ！」

「……行きます」

腕の中の遙のいい匂いにくらべるけれど、なんだか今は頑張れ
そうな気がする。

無邪気な表情で寝ている遙を見ていると、何故か力が湧いてきたの

だつた。

アルフ side

危なかつたね。

あんな所で愛の力だのなんだの言つ訳にはいかなかつたのさ、だから許しておくれ、フェイト。そんなに怖い視線で見つめないでおくれ。

どうやらあちらは戦闘が始まつたみたいだ。

それで、こちらにはあの使い魔が来る。

「使い魔同士で戦え、つてことか」

「使い魔ではないんですけれどね。・・・それよりも、何故、ジュエルシードを？あれは危険な物なんだ！」

「『主人様・・・と言つよりはその鬼婆の意思だけれどね。』こちらにも負けるわけにはいかない理由があるつてことさー。」

そのやりとりからこちらでも戦闘が始まつた。

アイツはどうやら直接戦う能力はないようだ。

・・・バインドのセンスもアイツより劣るが、どうやら場数は踏んでるみたいだね。

ぎりりなさは感じない。

「その程度のバインドでつー！」

奴に殴りかかる。

シールドを展開させて来たが、それを打ちぬく！

しかし奴は持ちこたえたようだ。意外とやるね。

そしてじばりくお互いの隙を突くよつた戦闘が続く。

「これで・・・落ちるつー」

「うわあああつー」

シールドを抜いて吹き飛ばす。

フェイトの方も戦闘が終わったみたいだし・・・

フェイトのバルティックシード、じばりくつを確保したあと、あの白いのに話しかけられていた。

「・・・教えて、あなたの名前は・・・？」

「・・・フェイト。」

「フェイトちゃん、じばりしてこんな事をするの？私たちは民間協力者。ユーノくんのお手伝いでジュエルシードを集めている。・・・事情を話してくれれば協力できるかもしないー！」

「私・・・は・・・」

駄目だ、こんな所でフェイトの戦う意味を曲げさせんわけには！

「言わなくていいよ！温かい所で育つたような奴らに、フロイトの氣持ちは分からぬ！」

そう言つた所で、フロイトから念話で帰る、と言われたので、帰るために魔法で飛び始める。

「・・・もう、諦めてください。次は、手加減出来ないかも知れない。遙も終わつたらやんと返すつもりでこまくす」

そう言つた所で少し顔がにやにやつてゐるよフロイト。あの白いのがなんだか変な表情してゐるじゃないか。

そして、アタシ達は飛び立つた。

なのは side

「負けちゃつた・・・ね。」

そう、負けちゃつた。

あつやは遙くんを抱えていたのに。いや、前より動きが早かつた気がするけど気にしてやいけない気がするの。

「負けた・・・ね。」

「私、甘つたれてたのかな？最初は、ユーハくんや遙くんと回りじみ

う、魔法が使えてうれしい。その力でゴーノくんやみんなを助けられるならって、そう思って……」

「なのは……」

「魔法で痛い思いをするよりも、怖い思いもすることも考えてなかつたの……」

「遙くんみたいに、戦つ覚悟、出来ていなかつたの……」

魔法を使えるようになつてから、なのはを守つたい、と毎日魔法の練習をしていた遙くんを思い出す。

・・・今度は、私が守る番なの。

「でも、今は、違う！絶対に遙くんを助けて、それで、フロイトちやことちやんとお話をやるの……」

フロイトちやんはなんだか遙くんの話をする時は顔が緩んでいたけれど。

お話を出来れば、きっと解決すると想つ。

でも、もつまつたれない。

戦わずに話して事情を解決しよう、だなんて思わないの。

・・・・・全力全開で戦つて、話を聞いてもらひつ。

僕、何をしていたんだっけ……？

あの後、何故か恍惚とした表情でフェイトさんに睡眠の魔法をかけられて……。

「……！」

「あ、気がついたんだね……！」

そう言って突然飛びかかってくる嬉しそうに笑うフェイトさん。

「！」は、私とアルフの部屋だよ。……そして、これから貴女も住むといふ

・・・貴方の発音が違つたような？・・・それより

「・・・僕も、住む？僕は・・・！」

そこで、部屋の中にアルフさんがやつてきた。

「まあ、人質つてヤツだね。まあ、フェイトはアンタの事をただの人質だとは思つていないようだけれど

「そ、それつて、どうこう・・・！」

「さあ、遙、目が覚めたことだし、一緒にお風呂入ろう？」

ベッドから僕を起こして、手を取つて立たせてくれた。あ、僕フェイトさんより背低いんだ。でも状況が理解できない……！

フェイトさんは女の子だよねっ！？

「な、なんで僕がフェイトさんとつーっ別々に入れぱーいよねっ！？」

？」

「ふふ、別に躊躇うこともないよね？」

そう言つて僕の脇と膝裏に腕を入れて抱きかかえるフェイトさん。マズイ、なんだかマズイ・・・って。まさか。

「ええと・・・その・・・僕、男の子なんですけれど・・・。」

ぱち、ぱちぱち、ぱちり。

フェイトさんの瞬きの音が妙に大きく聞こえるくらいに部屋が静かになつた。

そして・・・

「「ええーっ！？」

ふたりの悲鳴が部屋に響きわたつた。

僕・・・そんなに女の子なのかな？

フェイト side

そんな・・・遙が男の子？
でも、言われた時、自然と嫌な感じはしなかつた。
そう、私は遙が好きなんだ。

男子子でも女子子でも。

ちょっとと非健全なのが健全になつただけだよね！

「そ、そだつたんだ……さて。」

「さて？」

「お風呂、入るつか」

「……あ、あれ？え、ちょっとつー！？性別違うつて分りましたよ
ね！？」

「フヒイトはアンタの事が好きだつて事だ。諦めな

「え、ええつー！？」

私が遙の事綺麗してあげるから……
うふふ。

「わー、わーつー！」

半ば狂乱状態でもがく遙。

ああ・・・涙目で・・・可愛いなあ。

・・・・・・・・・・・その後、女子子の嬉しそうな声や悲鳴などが聞こえ、我が主人とその思い人？の声ながら、アルフは顔を赤

くしたのだと
か。

最近急速に遙に感情が芽生えますね。
ビーナ、リスナ、モーしゅです。

遅れた割にいろんなで「めんなさー」。

たぶん1日1回更新はもう出来ません。これ

昨日ヤンデレな女の子の眠れない例のじロを聴きながら寝ていたら
こんななりました。

ヤンデレっぽくはないけれど一途っぽくしたかったんだと思います。

・・・まあ、あれです。僕はこんな感じのフロイトが好きだったつ
て事で、(どこからか飛んで来た金色の砲撃魔法に吹き飛ばされる

遙「作者さんが飛んで行ってしまったので僕が言います。」

遙「お疲れ様でした、駄文を読んでいただいてありがとうございました！」

囚われの姫様。（前書き）

誰が何をしたのか、自宅のPCがサイトに繋がった……。
テンション高いまま、次話投稿です。

この回は妙に難産でした。

どこまで調子に乗れるか、とかうか本能のまま書けるか、とかうか
(?)

今回は原作のお話にはないオリジナルのお話（遙はこの後どうなる
かのお話）なので、短くなります。

前話も短くなると言つてたので、なんかアレですが……。

活動報告に詳しく書きましたが、マイペース様、クロスのお話は遅
れます、ごめんなさい……！

ちなみに、いつのまにか総合PVが10000を超えていました。
ありがとうございます！

では、どうぞ。

囚われのお姫様。

フェイト side

あの戦いの後。

疲れた私たちはとりあえず寝ることにした。

遙は睡眠魔法が切れても疲れたのか寝てしまっている。
ふふふ、寝顔、可愛いなあ・・・。

今は朝。

私は目が覚めたけど、遙はまだ寝ていた。

私は既に気が付いていた。

私は、遙の事が好きなんだ。

ひとめぼれのようなものだけれど。

そりや、殆んどの世界では同性愛は異端とされたり差別めいた扱いを受けるけどや。

・・・私は好きなんだ。

この気持ちさえ本物ならば、きっと遙も応えてくれる。

・・・・・この考えが不要だつた事を知るのはもう少し先の話だつた。

遙 side

目が覚める。

僕は、寝ていたのか？

・・・ そうだ、先行したらフェイトさんが既に僕が来た時のための算段を立てていて、情けなくも僕は捕まっちゃったんだっけ・・・。

「あ、目が覚めたんだ？」

「ええと・・・ フェイト・・・ ゃん・・・ !？」

思わず自分が寝ていたベッドから起き上がり、デバイスを起動・・・あれ？

「あれれ？」

「ふふ、人質に戦う力は残さない、でしょ？」

確かにそうだけれど、僕は男の子、フェイトさんは女の子。

「もし僕が直接仕掛けたら？ がおーっつて」

手を使つて表現してみる。

「・・・ 襲つの？」

何故かフェイトさんは顔を赤らめてしまった。

「・・・ まあ、それはそのうちどうとかするとして

何を言われているか分からぬのに背筋に冷たいものが走ったのは

フェイトさんが「うつとつした顔をしているからなのだらうか。

「試してみる?」

「・・・え? ええと、えいやつ」

逆に誘われてしまった。僕は男の子、彼女は女の子 - - - - -

「ふにゅつー?」

「ふふふ、だから言つたでしょ?」

とりあえず手を後ろ手にするくらいたには僕にだつて、そう思つた僕が馬鹿だつたのかもしれない。

フェイトさんの腕はまったくビクともせず、逆に押し倒されてしまった。

そういうえばフェイトさんが体大きかつたのを失念していた。

・・・魔法を使わない限り反抗は無理、か

「・・・はあ・・・」

押し倒した体勢でフェイトさんが「うつとつしたよ

うな表情を浮かべている。

その表情が怖いです恐いですコワイです。

すっかり怯えてしまつて泣きかけているが、それはフェイトさんを喜ばせているだけらしい。

「フェイトー、遙は目覚め - - - - -」

そんな時、アルフさんが部屋に入ってきた。
助かった……！

「すまない、邪魔したね」

そそくわと退散していくアルフさん。

「いや、フロイトさんをなんとかしてやったさーーー。」

数分後

「助かりました、アルフさん」

「ははは、確かに目覚めていきなりは酷だからねえ」

なんとかアルフさんに助けてもらえた。
フロイトさんは不満顔で、「むー、じゃあお風呂と寝る時は一緒に
もん」と言つていた。

どうしてだろう。寒気が止まらないや……
今はリビングのテーブルに3人で座っている。
椅子が3つあったのは用意がいいからだよね？

「まずは、アンタの今後からだね」

「はい・・・人質・・・ですしねえ」

「本当はこうこうの使いたいんだけど、別に魔法も使えないし、別にこらないかなって」

そういうてフロイトさんが手元に置いてあつた大きめの鞄から何かを取り出す・・・首輪に手枷に足枷に少し長めの多分指を動かせなくなる鍵付きの手袋のよつなものなど、色々と入つていた。

「遙が別にいい子にしてればいらないかなつて。悪い子だつたらおしおきしなくちゃいけないんだけれどね」

その時にこそ、鞄の中身が使われるのだろう。

「ええと、質問なのですが

「何かな？」

「これは何でしょつか？」

そう言つて左腕に付いた腕輪を指差す。
左腕に付けられているのだが、外れない。

「それは魔法の腕輪で、遙の魔法を封じる腕輪だね」

「デバイスは取り上げたけどさ、念話で助けを求められちゃかまわないし、アンタならデバイス無しでもある程度魔法を使えるだろう？」

「ちなみに、発信機の役割もしているから、私たちからは逃げられないよ？」

なるほど、だから外れないのか。
だとすると、脱出は家からでてとにかく走る、くらいなんだろうけ

ど。

さつきの体格差から考へると、きっと走つても僕の方が遅いのだろう。

・・・おとなしくした方がいいのかな。

ちなみに、服はあの後のままで、例のコスプレ服のままだ。
フェイトさん達をきっと驚いただろ。フェイトさんは逆に喜びそうだ、と思つたのは、フェイトさんの性格がわかつってきたからかなあ。

「次、です。学校はどうすれば・・・」

「ああ、それなら既に学校に連絡してあるよ。フェイトに感謝だね、
その点は」

「別に、遙の大人になつた時の声を想像しただけだよ?」

それ、凄いよね?

どうやつて僕の通つている学校から何やら調べたのは分からぬけれど、きっと聞いたら後悔するので聞かないことにした。

「質問は以上かい?」

「あ、はい。」

「今後はジュエルシード探しの時や例の白いのが襲撃に来た時以外なんかはアンタは部屋に待機、ということだね。」

「了解しました」

「外出時は特例で腕輪を外すかもしれないしデバイスを渡すかもしれないけれど、何か変な事したら……分かつてるね？」

「……はい。」

「じゃあ、この話は終わりっ！遙はあの後寝てたんだし、お風呂入るっ！」

そういって僕を立たせ、いい笑顔で腕を引っ張る。

今は時計を見る限り、あの後数時間経つて昼前、といつた所なのだが、慣れない体験もあつたので汗だらけだつたりする。

しかし、それは女の子どしきで入るもので……！

「フロイトさんは女の子なんですから、僕と一緒に入っちゃまよいんじや……！」

「え？ 何がいけないの？」

きょとん、とするフロイトさんにアルフさん。アルフさんまで事情が分かってないようだ。

いい加減、慣れたけれどさ。

「僕……男の子なんですが……」

ぴきいっ

その時、確かに空間が凍つた気がした。

「ええーっ！？」

「別に、騙すつもりはなかつたんですが……」

「遙……が……男……？」

「フロイトさんがうわざのようになってしまった。」

「さて、お風呂に入らうか」

再び笑顔で引っ張るフロイトさん。……あれ？

「僕、男の子って確かに……」

「まあ、フロイトは遙のことが本当に好きだったってことや。諦めな」

「でも……」

「じゃあ力づくで行くね」

そう言つてフロイトさんは僕を抱き上げ、そのまま所謂お姫さま抱つひで部屋を出て行つた。

「遙の裸……ふふふ……」

「嫌あーつー?」

その後、女の子の悲鳴と嬉しそうな声がそのままマンションに木霊したところ。

囚われのお姫様。（後書き）

久しぶりの執筆でまた書き方が変わった気がします。うわああん。

やつぱりオリジナルなお話を組み立てるのは大変で、苦手のようです。

今回は遙の今後と、同性愛じゃなかつた！ってお話をでした。

相当無理のある展開かも知れませんが、（人質って言つたら後ろ手に縛られて人以下の扱いつつイメージですが）子供とその使い魔だしこんな感じでいいのかなって。

次回はまた原作に戻ります。

遙を人質らしく扱いか甚だ疑問ではあるのですが。

それでは、駄文を読んでいただきありがとうございました、お疲れ様でした。

ふたりの思こと救出♂。（前書き）

さて、今回もさうにか更新です。

遙「不自由があまりない人質っていうのも・・・」

不自由を「所理です？」（首輪用意）

遙「・・・」めんなわ「」（向こうでがっかりして「」のフロイトさんを見て見ぬふりしつつ

今日は強引に次元震を起ししたいのどちらと強引な展開になると
思こまか。（いつもそつだよねつてツツ「」は無しの方向）（「」ゆ

遙「あはは・・・では、どうぞー。」

ふたりの想こと救出♪

なのは side

遙くんが攫われちゃったあの日。

あまり騒がせてはいけないと思つた私とコーノくんは、遙くんは事情があつて先に帰つてしまつたと嘘をついてしまつたのでした。

遙くんの両親と一緒に帰つていて、朝には少し遠くに出かけてしまう、と。

旅行に持つていつたお荷物は一時的に私の家で預かることになりました。

あの日以来、もう一度とこんな事を起しちゃいけない、と。

決心した私はいつもよつ多く、そして熱心にコーノくんと魔法の練習をしていきます。

遙くんを取り返すために。

遙くんは今ビリビリして、何を思つているんだろう。

フェイトちゃんのことはよく分からなにけれど、あいつは今まで酷い扱いは受けていなことは思つた。

遙くんは私たちの助けを待つていてるのかな？

それとも、自分なんてどうでもいいからジュエルシーで探しをして欲しいと思つてているのかな？

遙くんだから、わざ思つててゐる気がするの。

遙くんがいなくなつてから、みんな元気なくなつちやつたんだよ？

アリサちゃんは「遙が帰つてきたら一発殴つてやるんだからっ！」

「…

つて。アリサちゃんのグー、とっても痛いんだよ？

すずかちゃんも「遙くん・・・ふふふ・・・」つて明後田の方向を向いて笑ってるんだよ？すずかちゃんはどこかの方向を向いてひとりで笑ってる時つてとっても怒ってるんだよ？

でも、それは私のせいで、私が原因で・・・。

魔法のことがあるから話せない自分が情けないです。

私が甘つたれていたからみんなに、遙くんにいっぱい迷惑かけて。だから私はもう甘つたれない。

私は遙くんを助けたい。そして、フロイトちゃんとお話ししたい。もひ、お話しだけで戦いたくないなんて考えない。

戦つて、お話し、聞いてもらひのー。
そして、遙くんを返してももらひのー！

遙 side

夕方。

さほど人質らしくない生活（ご飯は冷凍食品だったそのうで、僕が作つてみたり、空いてる時間は家事してみたり）を送っていた僕は、そのお話を聞いて、とうとうか、と思つてしまつた。

ジユノルシードを発見、強制発動をせて封印する。

僕はテバイスを取り上げられた状態、腕輪をつけられた状態で同行することになつた。

わざわざ僕を連れて行くことも、とは思つたが、直接連れていくことで揺さぶりをかけるつもりでもあるらしく。

つぐづく自分が情けなく感じじる。

どんなに家事をしていても、仲良くしてもらえて、結局は人質なのだ。

後ろ手に手首を縛られ、アルフさんに抱えられ出発する・・・だけ

帰つてくるのが遅れると思ったので家事を一気に終わらせて夕食まで作り終わつて冷蔵庫に入れてから出発したので、凄く・・・疲れた。

縛られた手首もフェイトさんの経験の力なのか全然痛くないし・・・びくともしないけれど。

抱えて貰つて楽な体勢だったので、つい、ひつひつひつひつ。

「遙、着いたよっ一起きなっ」

ゆさゆさ。

「ふあああ・・・」めんなさい、寝てました?

「まだ真夜中でもないのにこんな時間に眠くなるくらいに働かせちやつて申し訳ないんだけどね。家事が誰も出来ないから、つい、ね・・・」

「あはは、家事は楽しいですし別に構わないですよ。・・・ええと、今ジユエルシードを強制発動させた所、ですか?」

「まあ、そうだね。結構広い範囲に発動させたことを知らせないと、なるから、例の白いのが来るかもしねないね」

なのはさんのことなのだろう。

名前を教えてもいいのだけれど、聞かれてもいないし、きっと本人が自分から話したいだらうから言わないことにした。

お互いの名前を教えあう事からきつと始まるんだろうから。

「・・・来ましたね」

「その、ようだね」

遠くから高速で接近、する白い女の子。

白いバリアジャケットを纏つたなのはさんだつた。・・・あれれ、今日は肩にコーノさんが乗つかつていない・・・? 今日は都合が悪いのかな?

「・・・遙くんつ！」

「ジュエルシードから手を引いて下さい・・・遙を傷つけなきやいけなくなる」

「！」の前は自己紹介できなかつたね、フェイトちゃん。私は・・・高町なのは。理由を・・・話してよ。私たち、民間協力者。力になれるかもしれないから・・・」

まっすぐにフェイトさんの目を見て言つなのはさん。

フェイトさんの視線が揺れているのが分かる。

まだジュエルシードを集めめる理由を聞いていなかつたけれど、確かにみんなで集められたらどんなに楽だらう。

危険であることは既に分かつているようだつたし・・・。

「ダメだ、フェイト！　私たちの最優先事項はジュエルシードの確保だよ！」

隣で僕を抱きかかえているフェイトさんが声を荒げる。
確かに、そうだけど・・・

「ごめん、アルフ・・・そういう、ことだから

再び、強い意志を感じさせる表情でデバイスを構えるフェイトさん。
「もし、私が勝つたら・・・ただの甘ったれた子じゃないって、思つてくれる？」

決心した、強い意志でレイジングハートさんを構えるなのはわかる。
その決意には、僕が攫われたことも関係しているのかと思つと、少し胸が痛くなる。

2人とも既に戦つ気だけれど、僕の事、忘れてませんかフェイトさん？

2人とも今すぐにも戦いを始める・・・そんな時だった。

「止まりな！」つむには遙がいるんだよ！

「ごめんよ、遙。そう、小さく呟いたアルフさんが僕の片足だけ持ち、逆を吊りの要領でブラブラさせた。ゆ、揺れる・・・！」

「あ・・・」

「は、遙くつ！？」

2人ともすっかり忘れていたらしい。そう顔に書いてある。さて、これでなのはさんは動けなくなってしまった。このまま、フェイトさんがジュエルシードを確保して終わり、そう思っていたのだが。

「…………！」

突然聞こえた声。

「」の声は・・・

突然アルフさんの体が吹き飛ばされ、僕を離してしまつ。落下を始めた僕を再び抱えたのは、

「・・・・ゴーノさんっ！」

「「」めん遙、遅れた。怪我はない？」

どうやらゴーノさんが体当たりしてアルフさんを弾き飛ばしたようだ。だから一緒にいなかつたのか。ゴーノさんは僕を確保してすぐに封時結界を展開し、縛られていた手首を開放する。

「「」の腕輪はどうやら解除に時間がかかるね。」めん、今回は我慢して」

「あ、はい・・・。ありがとうございます、助けてくれて」

「ははは、君がいないとみんな元気が無くてね・・・なのはつ！全
力前回、だよつ！」

「うん、ありがと、ユーノくんつ！」

力強くレイジングハートを構え、フェイトさんとの戦闘を始めるな
のはさん。

砲撃魔法だけではなく、いつのまにか魔力スフィアの生成や射撃魔
法での牽制も出来るようになったようだ。

僕の取り得を取られた気がしたのは秘密です。

「よくも遙をつー！」

おつと、じゅらじアルフさんが向かってきた。
いつのまにか僕がそちらの味方にいるような口ぶりだつた。
・・・確かに、楽しくはあつたんだけれども。

「ちよつと待つてね、遙」

そう言つてユーノさんは人1人入れる小型の結界を僕に展開し、離
れて戦闘を始める。
どうやら今回はユーノさんもアルフさん対策をしてきたのか、拘束
魔法を高速で展開できるようになつていた。

それぞれの戦闘ではそれぞれ拮抗していたが、なのはさんとフェイ
トさん、お互いが射撃魔法を被弾し、吹き飛ばされた時に戦局は大

さく動いた。

離れた距離からの戦闘維持は不利と判断したのか、お互いがジュエルシードに向かつて高速で向かつたのだ。

お互いが射撃魔法を放ちつつ、ジュエルシードに向かい - - -

「いけない、なのはつ！」

お互いのデバイスがジュエルシードに触れた時、眩い閃光がジュエルシードから放たれ、フェイトさんとなのはさんはその閃光 - - - ジュエルシードで暴走した魔力に吹き飛ばされ、近くで結界魔法の中にいた僕も結界魔法を抜かれて吹き飛ばされてしまった。

「うわああああつ！？」

そのまま吹き飛ばされた僕は、たまたまなのかユーノさんの近くに吹き飛ばされ、再び抱きかかえられた。運がいいのかな？

お互い満身創痍の状態で、デバイスも既に機能できないほどにボロボロだつたが、フェイトさんがジュエルシードに向かつ。

「ジュエルシードを集めて帰るんだつ、母さんのところへ・・・！」

素手で封印・・・無茶だ！

しかし魔法の使えない僕には何も出来なく、魔力を全て放出したのか意識を失つたフェイトさんをアルフさんが抱きかかえ、なのはさんを一睨みし、転送魔法で去つていつた。

・・・あ、僕も・・・ちょっと辛い・・・かな。

そして、僕も意識を失つた。

ふたりの思いと救出♪。（後書き）

結局直ぐに救出されたことになってしましました。
あまり今回は病んでないフロイトさんでした。

遙「悪い事……じゃないよね……？」

いや、そりなんだけれども。

なんというか、今回も頑張つてはみましたが微妙な出来ですねえ・・・

・ w

あ、今回以降もちゃんとフロイトは病みますよー。（誰に話している
なのはせんにもこつかは・・・とか思つてゐる私は末期ですね、はい。

遙「大変なことになるからやめてーっー？」

さて、今回以上です。

いつも以上な駄文を読んでいただきありがとうございました、お疲れさまでした。

水色の魔力光の幼女と赤色の宝石と「だれが幼女だー」（前書き）

お久しぶりです。夏休みの課題なんて嫌いです。

遙「あはは・・・お久しぶりです。」

なんとか書けそなので頑張つてみます。

今回はなのは側メインです。

あと、クロノくんが出てくるのは次回です。

今回はちょっとした日常話 + のつもりです。

そういうえば、非常に今更なのですが、作者があつさりとした話が好きなので、これ以降もおそらくキャラクター毎の心理描写を楽しんだりとか出来るようなお話は書けないと想います。

申し訳ないです。

シリアルスよりもギャグやほのぼのとして簡単に読めるお話を目指しています。

遙「作者曰く書くのは苦手だそうですが、どうせやつ

！」

水色の魔力光の幼女と赤色の宝石と「だれが幼女だ！」

遥 side

「知らない天井・・・ではないなあ」

「にやはは・・・おはよう、遙くん」

目が覚めて最初に目に入ったのは知らない天井・・・ではなくのはさんの部屋の天井。

次に苦笑しながら僕の顔を覗き込んできたなのはさんの顔だった。あ、ユーノさんが肩に乗ってる。

「ええと・・・あの後・・・」

「ええとね、ジュエルシードはフェイトちゃんに持つていかれちゃつたから、私は遙くんをおぶつて帰ってきたの。でも、遙くんの家、開かなかつたからうちで、ね。」

「なるほど・・・ありがとうございました」

悪い事しちゃつたなあ。

次は、自分の身は自分で守れないとなあ・・・

「う、ううん、大丈夫なの！」

「・・・？」

普通に笑つてみたつもりなのに、何故か凄い勢いで顔を背けてしま

つたのはさん。

何故か肩に乗つてゐるユーノさんが苦笑しているし。

「そうですか。ええと。僕をなのはさんがおぶつたんですか？」

「うん、そうだよ。遙くん軽かつたよ？」

「ちょっと・・・ショックです・・・」

華奢で運動が苦手な女の子でも軽々と運べる僕って・・・

「だ、大丈夫なのー。華奢で可愛らしくていいこと思つのー。」

「それは女の子の基準つー?」

「おせせ・・・ドンマヘ、遙」

ユーノさんが頭の上に飛び移つてぽんぽんと頭を軽く叩いて慰めてくれたのがとても嬉しかつた。

・・・なのはせんの部屋のベッドの布団、温かいなあ。なんだか良い匂いもするし・・・ってあれ?なのはせんの部屋のベッド?僕が?

「うああああああつー!?

バサッ！と勢いよくベッドから飛び出して床に着地する僕。なのはさんは驚いている。

「... ?」
... ?

「なんでなのせきとのベッドつーつ？」

「うん。 いけないのかな？」

「僕が・・・おかしいのかな・・・」

「あはは・・・」

ユーノちゃんの苦笑を聞きながら、どうして僕はこんなにも女の子なのだろうと想えていた。

なのは side

何故か遙くんが落ち込んでいる。

フォローしたらもつと落ち込んでしまったの。

・・・どうしてこうなったの。

「ど、とつあえずなのつー今後のことなんだけビ・・・

ちょっとと強引に話をえたの。仕方ない事なの。

「あ、それなら僕が。」

「うん、ユーノくん、お願ひ。」

「なのはと僕は昨日の戦闘で魔力を大量に消費しちゃったから数日はまたもな戦力にはなれないんだ。レイジングハートも損傷してい

るけれど、なのはが残り少なかつた魔力を使って修復に充てたから半日くらいで元に戻るね。」

「それでは数日間探索だけで封印と回収はしないのですか?」

「しばらくお休み、と言いたい所なんだけどね。きっとあつちはあまり休んでいられないと思うんだ。ジュエルシードに並々ならぬ執念を抱いているようだからね。」

そこ今まで言つて遙くんが考えはじめたの。

「僕が1人で、つてことですか?探索はともかく封印は自信ないのですが・・・」

「こんな時のために僕は君に封印魔法を教えたんだよ?それに大丈夫、レイジングハートを持たせるから」

『セットアップは出来ないので戦闘は行えませんが、魔法の行使などについては補助くらいなら出来ます』

「や、そなんですか・・・。ではよろしくお願ひします、レイジングハートさん。」

『ええ、宜しくお願ひします、ハルカ』

レイジングハートが離れて行っちゃうのはちょっと寂しいけど、これも仕方ないとと思うの。

ユーノくんが言つには適合率も高いそつだし。

と、いう訳で翌日の放課後。

朝の学校では文字通り大変な日になつた。

アリサさんには教室に入った瞬間にドロップキック。
そのままぽかぽかと叩かれた。

なんとか謝つて離したら、今度はすずかさんが抱きついてきた。
なんだか少し見ない間に大胆になりましたねすずかさん。

こんなんだから未だにクラスのみんなは僕を男の子だと認めてくれ
ないんじゃなかろうか。

その後休んだ授業の分のノート等をコピーして纏めてくれたものを
渡してくれた2人にはとても感謝していたり。

そんな学校も終わり、今、レイジングハートさんをなのはさんから
受け取つて海鳴のあたりを歩き回つています。

と言つても反応をポンポン感じるわけもなく、念話でレイジングハ
ートさんと話しながらの探索。

どうやらレイジングハートさんはなのはさんのお姉ちゃんのような
お母さんのような、そんな印象です。

「」の前の戦闘でなのはさんがぞましい成長をしていたと思つた
ですが、一体なにがあつたんでしょう？」

《マスターが決心したようで、今まで以上に全力で魔法の練習をし

てこましたから。その決心にはハルカが攫われたことも関係しているようですよ》

「それはそれでなんだか複雑ですけれど……」

《ですがやはり私は貴女が戻ってきて嬉しく思いますよ。マスターも嬉しそうですし、ぎこちない笑みを浮かべることもなくなりましたし》

・・・なんだかShieって聞こえたぞ。

「僕は男ですよ。・・・それは僕も嬉しいです。情けない話だと思いますが・・・」

《物的な証拠はありませんから。・・・急速な成長といえば、貴女もでは?通常習得の難易度の高い拘束系の魔法や探索系の魔法の熟達。それに封印系の魔法もすこしづつ上達しているようですし。加えて初歩であっても射撃魔法を習得。魔力量で言えばマスターは非凡な才能を持っていますが、貴女の魔法の上達速度もとても優秀だと思います》

「あはは、ありがとうございます。物的証拠がないならあそこで脱いで见せましょうか?」

あつちの茂みを指差す。冗談のつもりなので、本気ではないのだが。

《大変興味深いですが、遠慮しておきます。私の興味なんかでハルカやマスターをはじめとするたくさんの方を悲しめたくありませんから。》

「まあ、冗談ですか。・・・あ、レイジングハートさん。」

『ええ、ハルカ。ここから北に560メートルあたりに微弱な魔力反応を確認しました。ジュエルシードの魔力反応と一致しました。』

・・・行きましょう、ハルカ』

「All right, my master it's?」

『デバイスに従う魔道士ですか。・・・いいかもせんね』

「いいのかつー!?」

『実は話してみるととても楽しいレイジングハートさんと軽口を言い合いつつ、反応のある所に向かつ。』

「・・・!」ですね。レイジングハートさん、行きますつー。』

『ええ、ハルカ。封時結界、展開』

レイジングハートさんの声と共に、封時結界が展開される。これで、後は暴走しないように封印するだけだ。

『暴走の反応はありません。ハルカ、封印を』

「はいっ! ジュエルシードシリアル? ? 、封印つー。』

呪文を唱え、封印を開始する。

レイジングハートさんは展開していないので、右手を前にかざし、左手に握られているレイジングハートさんを胸のあたりに。デバイスは取り上げられたままだ。

胸の前に持つていったのは魔力の源であるラジーリンカーロアの近くにあつたほうがいいかと思つたからだ。

『封印開始。・・・少し魔法がブレていますよ』

「・・・わわつ・・・う、んんつ・・・！」

『進度、良好。問題、特に無し。封印、完了』

封印の完了したジュエルシードがレイジングハートさんの中に吸い込まれていく。

完了、と。結界を消す。

『本格的な補助もないで暴走の警戒をしていましたが、流石ですね、優秀です。マスターには劣りますが』

「ありがとうございます。・・・なのはさんがとても大好きなんですね」

『それは少し違いますね。私はマスターを尊敬しているのです。それに、彼女が私のマスターですか』

「そりなんですか。では、帰りましょうか」

『傾いた夕日は、何故か赤い宝石のよつなものと親しげに会話する危なげな幼女を茜色に染めていた。』

「誰が幼女だつ！？」

水色の魔力光の幼女と赤色の宝石と「だれが幼女だ!」（後書き）

と、いう訳でまた変な展開になりました。

私の中のレイジングハートはこんなんなのです。

ハルカには親しく、でもマスターをすこし過剰に信頼した、お姉さんのような。

デバイスと言うのは本来あまり話さないイメージですが、私はデバイスが好きなので・・・（笑）

次回はあまり間をあけず投稿できると嬉しいです。頑張れ、私！w

突然の再会（前書き）

さて、次話なのです。

そろそろクロノくんの出番でしょうか。
キャラクターが増えると表現が怖いです。

一応クロノくんは好きなのですが、さて、みんなとは会うのがどうか・・・。

余談ですが、私は残念ながら鞭で以下略なシーンが苦手ですので、直接表現はしないつもりです。
ごめんなさい。

では、どうぞ。

・・・なんだかどんどんチート化してゆな、遙・・・

突然の再会

遙 side

レイジングハートさんと一緒に行動するよになつてから数日。

学校ではすずかさんやアリサさん、なのはさんといつも通り行動していた。

魔法関係で色々あるから隠し事は増えちゃつたけど、なのはさんも僕もそこまで深刻な状況ではないので、たいして問題も起きなかつた。

でも、いつか機会があつたら話すつもりでいる。

僕らが成長したらコーコーさんの話す魔法文化の発達した世界に行く機会もあるだろつか。

でも、僕にはいくつか気がかりな事がある。

ひとつに、僕の両親。

デバイスを置いていったのだから間違いなく魔法関係者なのだろう。

今回のお仕事は長らく帰つてきていないので、きっと魔法を実際に長期間使用するお仕事なのかもしない。

・・・無事だといいんだけど。

ふたつめ。フロイトさん達のことだ。

危険を冒してまで母親のためにジュエルシードを集めている。

以前攫われたあとそんな事を言われたのだが、明らかに危険で、度を過ぎていると思う。

それでもフロイトさんは頑張っている。

もし人でなしな人だったら、どうにかして、考えを改めさせたいと思つてゐる。

会つたこともない人に対しても出来るとは思わないが。

それでも

僕に何かできるのなら

フロイト Side

母さんに昨日久し振りに会った。

てしまつた。

母さんはもつと辛かつたはずなんだから・・・。

傷はアルフに治癒魔法を使つてもらつて今はほぼ完治している。

もう、失敗しない！

今度こそ、母さんを喜ばせるんだ - - - - -

夕方。

無事魔力も回復して普段通りになつたなのはちゃんとコーヒーちゃんと一緒にるのはさんの部屋にいる。

どうやら今両親がいないことはなのはさんの両親も分かつてしまつたようで、寝泊まり以外はほほなのはさんの家で生活している。士郎さんや桃子さんには家で生活しないかといわれているが、そこまで世話になるのも悪いので、家事や翠屋でのあまり重要ではないお仕事を手伝つことをこいつらからお願いして、今に到る。

料理は出来てもお菓子を作る経験なんて殆ど無かつたので仕方ないと思つ。

もつ出来てもそつやひねりもひねりの仕事ではないのだが。

最近はジユエルシード探しに進展はなく、今日も夕ご飯のお手伝いをして、洗い物をして、頑張つてなのはさんとお風呂に入るのを阻止してー とても大事 、と考えていたのだが、突然の魔力反応に、その思考は中断されることになる。

「・・・魔力反応つー・フハイドさんか・・・?」

「行け、なのは、遙ー」

「うんつー・頑張ろ、レイジングハートつー」

《ええ、マスター。頑張りましょ。》

ちょっと散歩に出かけてくる、と告げ、僕らは魔力反応のあった地点まで走る。走る速さは僕の方が上だ。流石にこんな所で女の子に負けたくはない。

そして、到着したのだが・・・

「巨大化、してるね・・・」

「そう、ですね・・・」

『ジュエルシードの暴走した魔力を吸収していくようですね』

何故か最近よく話すようになつたレイジングハートさんの推測を聞きつつ、チーンバインドを発動させ、巨木の一枝を拘束する。僕はセットアップできないため、そこそこの距離からバインドを放つたため、あまり長時間は捕獲できないが、一瞬あれば十分だ。

「なのはさん、射撃を!」

「うんっ!」

チーンバインドが破られると同時に、なのはさんの射撃魔法が枝に命中。

魔力ダメージであるため、枝は折れないが、どうやらたいしてダメージもないようだ。

「本体の封印をするべきなのかな・・・? ゴーノさん、なのはさん

の援護をお願いします！目標はジュエルシードの封印で！魔力ダメージで弱体化させるのも有効だと思いますが、最終目標はジュエルシードです！」

肯定の合図を一人から受け取り、僕はフェイトさん達とのはさん達の中間位置へ走りだす。

まずは共闘すべき、という意思もあるし、フェイトさんの手助けをしたい、という意思もある。

チヨーンバインドの短時間差での連続発動。

ユーノさんからは天武の才とまで言われたが、ユーノさんの方が強度が今のところ上だ。

相変わらず長距離なので時間を稼ぐためであるが。

「はああああっ！・・・以外ときつかつたり・・・」

こちらに襲いかかってきた鞭のようにならぬ枝を横つとびでかわし、予め設置しておいた拘束魔法を発動させ、枝の動きを止める。

なんだか随分と魔法の行使に慣れてきた気がする。

- - - - あ、ふたりが本体に近付いてきた。

ギリギリの位置で援護するというのは、相手が離れたらいちからその差を埋めることになる。

拘束魔法の強度を確認しつつ、固定した枝の上を走つて僕も本体に向かう。

結構本気で行使した魔法だからそう簡単には解けないはずだ。

何でことをしているんだアイツは。

デバイスはまだこちらの手にあるのだから、無力化できたと思つたんだが・・・
バリアジャケット無しで、なんとあの白このだけでなくこちらの援護までしていく。

襲いかかってきた枝を魔法で固定し、足場にして本体にまで向かっている。

正直、冷汗モンだね。

だから、思わずフロイトに叫びってしまった。

「ちよっと遅だと」行つてへる

「本当は私が行きたいんだけど・・・お願い、アルフ」

遙 side

「あー、無茶してこらるアンタのお手つこひました

「ありがとうございます。僕はフロイトさんやなの丞さんの方が無茶してこらると思いますが・・・」

「3人とも同じようなもんを……まあ、あの樹をなんとかするまでだけど、よろしくな」

「はい、シリウス君」

アルフさんに抱いてもらつて、飛行状態で樹まで向かつ。

防御は一任できるので、アルフさんのいないフェイトさんを中心には保護しつつ、本体に向かつっていたのだが……

「……一番に着いちましたな」

「そうみたいですね……」

なんだか妙に息が合つたので、一番に到着してしまつた。

「あー……封印しちゃいますね」

「アンタ、封印まで出来んのかいつ！？」

そりや自分の成長速度には自分で驚くが、これは以前レイジングホールトさんに教えてもらつた結果だ。

補助してもらつた後に色々教えてもらつたのでかなり短期間で出来るようになつた。

自分でも驚くほど手早く封印し、樹は元に戻る。

さて、ここからはふたりの時間だ。

なのはさんとフェイトさんは2人で向かい合ひ、何かを話している。

僕は即席の治癒魔法の準備でも……

「折角だし、アタシ『ら』も一回、やらな『い』か？」

「あはは・・・せうなりますか」

右手をグー、左手をパーにして打ちつけ、準備は出来てるセーなアルフさんを見て思わず苦笑してしまう。そして、アルフさんから『デバイスを渡される。

「・・・いいんですか？」

「同じ相手に何度も負ける気はないからね。それに、勝つたらアンタはまた『デバイス毎』『ひき側』」

何となくアルフさんらしい。

「じゃあ・・・行くよッ！」

アルフさんが拳を振りかぶり、『ちから』は高速で向かってくるのと同時に、僕もラウンドシールドの準備をする。あちらも始まるといつ・・・だが・・・

パシイツ！

突然現れた見覚えのある女性に僕とアルフさんの手首を掴まれる。

「・・・・・・・管理局執務官、クロノ・ハラオウンだつ！」

なのはせん達側からそんな声が聞こえてくる。あちこち止められた
よつだ。

双方のデバイスを止めるなんて、物凄い技量の持ち主のよつだ。

「管理局執務官、姫宮薫よ。 - - - - 」 その戦闘は危険すぎる
わつーすぐに武装を解除しなさい。」

この人は・・・

「母・・・わん・・・?」

「ハメリヤ・・・アンタの母親かい? - ?」

僕は、母さんと不思議なじりで再会を果たしたのだった。

突然の再会（後書き）

と、言つわけで、遙の急速な成長とお母さんの登場回でした。

遙「自分でも異常じやないか、って思ひかけりよ・・・」

主人公の特権みたいなモノだけね。

一応砲撃魔法とか使わないだけマシなんじやないかなw

さて、今回登場したお母さんですが、容姿は遙がほぼそのまま成長した姿を思い浮かべてください。

バリアジャケットは一般局員のバリアジャケットが白くなつた感じです。

さりげなく自己膨胀性の強いお方なのがもしゃません。

さて、ではまた次回でお会いしましょ。早く会えることを私は願います。

要するに早く執筆したい。

母さんが最大の敵でした。（前書き）

更新が出来そうなので私はキーを叩くのでした。

薰さんについてのキャラクター設定も後で書く予定です。
といつかキリのいいタイミングに一気にやろうかなって・・・w

今回あまり本編は進まないかも知れません。
戦闘の無いシーンの方が書きやすい、のかな？

では、どうぞ。

母さんが最大の敵でした。

クロノ side

僕とエイミィ、薰執務官、母さん - - - リンディ提督は、先日起きた第97管理外世界 - - - 地球で起きた次元震について、モニターに映し出された情報を見ていた。

今回起きた次元震は、規模は小規模だが、それでも見逃せるものではなかつた。

事の発端は、報酬になるとロストロギア・ジニエルシードの運搬を行っていたスクライア族の者が、事故により地球に落としてしまい、現地協力者とその回収を行っていた際に、ジュエルシードを狙う魔道士と交戦、それによって起きた次元震である、ということだつた。

無謀
ね

「ええ、僕もそう思います、薰執務官」

「わへ、『おめでた』とほびなさこつてこつも語りしゆじやなこ」

「貴女は息子がいたじゃないですか・・・」

余程出来が悪い息子なのか無愛想なのか分からぬが、僕の母親の前でそういうことを言つのはいい加減やめて欲しい。
僕の実親が目の前にいるというのに。

まあ、その母さんも樂しかったらしいが、

まず、この事件は、スクライア族の少年、ユーノ・スクライアが不注意によって引き起こした、と本人から報告があがつてているが、関係者達はみんな仕方の無い事、やあの子だけが悪い事じやない、などと証言しているようだ。

それを現場監督を請け負っていたユーノ・スクライアが1人で責任を感じ、単身で地球まで行つた。

この時点で無謀だ。

とてもではないが、1人で出来る事じやない。

その上、現地で少年少女2人を魔法に巻き込んでしまい、その上で起きた次元震だそうだ。

報告だけ目を通せば、単なる愚か者。

しかし、それでも起きたことに対する償いは評価できると僕は考えている。

恐らく上層部には理解されないだろうが。

しかし僕の興味は、他の事に傾いていた。

現地で戦闘を行つた魔道士たちのデータだ。
送られてきた映像を確認していたのだが、

「うつわあ、すごいねえ・・・。この黒い子も白い子も、最大魔力量ではクロノ君を超てるよ」

「魔法は状況によつて最適なものを選択することで真価を發揮する
- - - どちらも物量戦のようにしか僕には見えない」

「黒い子はともかく白い子は現地で魔法覚えたてだからね。魔力量に頼つちゃうのは仕方ないんじやないかな?」

「確かにその通りなのかもしれないが・・・それで、この3人目は、

本当に素人なのか？」

「あら、我が娘に興味があるの？」

「息子ではありませんでしたか？ - - - 魔法の種類は限られているのだろうが、それでも他の魔道士より魔法の選択が適している。本当に短期間で習得したのか？」

「うふふ、遥は優秀なのよ？ まさかここまでとは思わなかつたけど画面には黒いバリアジャケットを着てている姫宮遥が映し出されている。

他の2人と違い魔力量が高い方が有利な砲撃魔法等よりは、拘束捕獲系の魔法を使用する所が多いようだ。

この魔道士もかなり優れた魔力量だが2人には劣る。

しかし、頭を使ったのだろう状況に比較的適している魔法、驚いたのはかなり高速な魔法の行使だ。

映し出されている、ジュエルシードによつて暴走した大樹との戦闘の映像。

その樹を抑えるためにかなりの速度でのチェーンバインド。隙を作るだけなら最適とはいえないが、それでも限られた手札で必死に工夫して戦う姿には好感を持てた。

僕はいつのまにかこの幼女のよつな少年と肩を並べて闘う事を願つていた。

まだ未熟であるようだが、それは僕もだ。

きっと、切磋琢磨できるのではないだろうか。

おっと、話が逸れた。

「とにかく、次の戦闘の時には取り押さえれる、ですね？」

「ええ、そういうことになるわね、期待しているわ、クロノくん、
薫ちゃん」

「「はい！」

遙 side

色々あつたが、結局僕となのはさん、コーカさんは執務官、という役職である、クロノ・ハラオウンさんと姫宮薫・・・・母さんについて来て、戦艦であるらしい「アースラ」に来ていた。結局フェイドさんとアルフさんは逃げ出した。

しかし、きっと時間の問題なのだと思う。流石に戦力の規模が違う。

「そういうえば、ここはもう戦艦内で安全だ。バリアジャケットは解除して大丈夫だ。そのフレットもどきも」

「あ、はい、分かりました」

なのはさんがバリアジャケットを解除したので僕も解除した。

「あ、はい、そうでしたね」

コーカさんも人型になつた。はじめて見たのだが、なのはさんがとても驚いている

「ふ、ふえつ！？　え、ええ、ええーつ！？」

・・・しばらへお待ち下せこ・・・

よつやく落ち着いたので、艦長室に案内される。

途中母さんと久しぶりに話したが、なんといつか全く変わっていかつた。

きっとクロノさんも苦労しているのだろう。

入った艦長室は、なんといつか、純和風な部屋だった。

ミッドチルダ、という世界にも和風、という文化は存在するのかもしれない。

「あら、どうぞ、座つて」

そのまま全員が座布団に座り、話が始まる。

自己紹介で、彼女は艦長である、リンティ・ハラオウンだそうだ。最初に彼女が沢山砂糖を入れた緑茶を飲んでいたが、あれは頭の回転を良くするためなのだろうか？ いつか試してみたいと思う。

話は、なのはさんや僕への管理局などについての説明や、そのままこの事件の今後についてだつた。

曰く、管理局は数ある次元世界を束ねる、地球でいつ警察の規模が大きくなつたような機関。

曰く、この事件は今後管理局が担当し、現地協力者である高町なのは、姫宮遙両名は通常の生活に戻ること。

だそうだ。

その事についてなのはさんが今後も協力したい、と言い、周りに止められていたが、結局リンディさんに承認された。というか、話し方や表情からこれを狙っていたんじゃないかと思えてしまつ。ならば、僕のやる事は。

「では、僕も協力させてもらえませんか？結局僕も全く関係していない、とは言い難いですし、両親とも魔法に関係しているようですし早かれ遅かれ魔法には触れていたと思いますし」

思惑に乗ることなのかなあ、って。

「とても冷静で頭の回る子ね。羨ましいわ、薰ちゃん」

「うふふ、いいでしょう？」

なんだかあちらは母親同士の会話になつてしまつていた。完璧にプライベートになつてこるような。

頭を押さえていると、

「お前も苦労しているんだな」

クロノさんに小声で話しかけられ、なんだか同情の表情をしていた。

「高町なのはさん、姫宮遙さん。協力、感謝します。明日から本格的にお願いすることになりますので、今日はゆっくり休んでください

い。それと、おふたりのお家への説明も明白、ね。魔法のことまで話せないけれど、突然いなくなつてしまつては大変です」

「はーいっ」

「わかりました。」

「遙ちゃんは薰ちゃんと久しぶりにお話をきるんじゃないから~」

「あ、はい、ありがとうございます。ですが僕は男ですよ~。」

そんな事もあり、結局解散となつた。

どうやらこの船は和の文化を取り入れていいようで、大型の浴場などもあるようだつた。

リンディさんや母さんはななさんと遙ちゃんは一緒に入れるわねー、などと言ってなのはさんは喜んでいたが、みなさん僕は男ですよ~。ちやんをつけるのはななさんじゃないですかね?

クロノさんとコーノさんの同情の視線に苦笑いしつつ、母さんと一緒に母さんの部屋の中に入つた。

寝るときはなのはちやんとねーと言われて反論したくなつたが、そこには有無を言わせぬ母さん。・・・何もないといいのだけれど。

母さんとの話はいろいろだつた。

魔法文化に始まり、あのデバイス、シールウェイップについて。

あのデバイスは父さんの作つた簡易デバイスで、父さんは「デバイスマスター」という資格を持っているそだつた。

ちなみに本格的に魔法に関わつた時のことを考えて、こつそりとリンク一コアを調べていたそうで、今は本格的なデバイスを製作途中

ううう。

「…………父さん母さんの強い希望でインテリジョンとテバイスになるらしい。楽しみ。

何故だかシールウェップもすくへじかへつときたし、結局は僕に適したテバイスとなるのだろう。

「遙ちゃんもお友達増えたのね？良かったわ

「ははは、みんな、魔法がきっかけ、ですがね

「それでも作ったのは遙ちゃんよ？」

時間も驚くほど早く進み、気がついたらもう夜といつていい時間だ。

「あら、もうこんな時間ね。夕食はお風呂に入つてから食べましょう。なの遙ちゃんと入つてね

「いや、だから僕とのはさんま……

そんな時、ドアが開かれ、なのはさん達が入ってきた。

「遙くん、お風呂はーいっ

「すまない姫宮。止められなかつた……

「あ、遙でいいですよ…………止めていただいただけでも感謝ですよ

「やうか。まあ、すまなかつた

クロノをと会話しこると、

「せひせひ、早く行きなさいな。なのはせひを待たせひや悪いわよ。」

「わわわーー？」

母さんに押され、もたついた所をなのはせひが受け止め、そのまま正面に抱つこして部屋を出て行く。なんだか凄くなのはせひが二口一口してくる。そんなに嬉しいのかな？

とこつかまだ会つてすぐなになんだらひのチームワーク。

「へー」

「あの、自分であるけますよーとこつか恥かしいです、離して下さいつー？」

お姫様抱つこは流れ。

「大声出しちゃいけないの。それこりうでもしないと遙くんは入ってくればいいの」

こうなつたら、同情してたり苦笑したりして隣を歩いている男性陣

「すまないな、止められそつこなこ」

「いめんね遙。僕の無理そうだ・・・」

おおっ、数秒で最後の砦が

自分の意志ではないものの、赤色の「女湯」と書かれた暖簾に向かつていることに気がつき、気分が滅入つてゐる僕だった。

・・・あつと寝るときも母さんによつて隣はなのはさんなんだらうな。

転送ゲートを担当しているエイミーさんつて言つ人に頼んで逃げ出してしまおうか。

・・・協力すると書つた晩にそれも危険すぎるか。

「さて、私が脱がせてあげるのつ

「自分で脱げますつてばーつ！？」

（明日一番に魔法の訓練一緒にしないか？気分転換にもなるだらう）

（あつがどうぞこます、ハラオウンさん・・・・・）

（いいや、クロノで構わない）

（クロノさん・・・・・）

助けられなくても気にかけてくれているクロノさんはきっととてもいい人。

明日、頑張ろう・・・・・！

「早くはーいろつ

「わわつ！？」

結局再びお姫様抱っこで脱衣場から運ばれていた。

と二つか二つの間にお母こに裸に・・・?

「離してくだれーこつー?」

-----その日、可憐らしき悲鳴が夜中に戦艦中に響いていたとか。

母さんが最大の敵でした。（後書き）

後半からなんだか集中力が途切れ 大変な文章になってしまいまし
た。ごめんなさい。

クロノくんは人の気持ちが分かつて思いやりのあるいい人です。
決してＫＹなんかじゃないのです。
あれは職務ですし。

夏休みも終わり、私達学生は再び学校が始まりました。
しかし気温的にまだ夏休みだと私は信じています。
8月つて100日以上あるものではありませんでしたつけ？

と、冗談は置いておいて、次回更新も早めにできたらいいですね。
では、今回はこの辺で。

駄文ですが、読んでいただきありがとうございました、お疲れ様
でした。

まつおとのひつでのたたかい（前書き）

前書きと本文が一緒になったところを刪り直しました
ので修正します

と、こうわけで前書きです。

初めてですよ。あとがきかいた後に前書きを刪り直しました。
今回は初めてのソロ戦闘回です。
いつも通り残念な感じですが・・・
では、どうぞ。

まつめのひどつでのたたかい

遥 side

さて訓練だ今日は訓練だ早く訓練だつ！

・・・・・田覚めですぐ僕はそんなことを思つていていた。

昨日は、あのあと強引に全身を洗われて、浴槽内でももがいていたので、（ほほ常に抱きかかえられていた くたくたになつて直ぐに意識が朦朧となり、ほほされるがままなのはさんの部屋で寝る）になつてしまつた。

気が付いてやばいと思つたのは深夜で、その時にはすでに抱き枕にされていて抜け出せなかつたので諦めて寝て今に至る。

（こ）は戦艦内なので朝日などから時間は分からぬのだが、なんとか見えたミッジード製の電波時計は5時半頃を示していた。

クロノさんは起きてるのかな。ちょと念話をしてみよう。

（クロノさん、起きてますか？）

（ああ、丁度今起きた所だよ）

（おはようございます。・・・今から部屋を出て朝訓練・・・とこ
きたい所なんですが・・・）

（ああ、昨日の状況を見れば分かるよ。・・・迎えに行くよ）

(助かります)

クロノさんに全てを任せたいとは思つてはいないので、なんとかな
のはせんを起^{おき}らわうとする。

「……なのはさん、起きてくださいっ……」

小冊で見る文化。

「・・・ふみゅ。遙ちゃん・・・?」

ぎゅつ。締め付けが強くなる。

「僕は男ですっ・・・起きてください、僕はこれから訓練ですっ・・・！」

「いや、離れちゃやだあ・・・・・」

፳፻፲፭

「あが、が・・・・・！苦しいですつ・・・・！」

このままじゃ折れるつー？

(「クローラー……せ、せやう……」)

思念くらい平静を保ちたかつたが、無理だった。

(分かつた、すぐに向かう)

少し慌てた足音が聞こえ、ノックの後、扉が開かれる。

「朝早くからすまない、クロノ・ハラオウンだ。高町なのは、起きているか?」

「・・・クロノくん・・・?」

ビーヴヤーブクロノさんの声で目覚めたようだ。

「遙とこれから訓練の約束があるんだ、すまないが、彼を解放してくれないか?」

「・・・訓練なら仕方ないの」

そういって抱いていた力を弱めるのはさん。五体満足・・・!

「いめんなさいなのはさん、行つてきます」

「うん、行つてらっしゃい遙くん」

ビーヴヤーブ完全に田覚めたようだ。

少し問題があつたが、遙と2人でアースラの訓練スペースに着いた。しかし、彼はいつもこんな調子なのか？もしそうなら、とても大変な日々なのかも知れない。

「さて、準備運動は済んだか？」

「はい、完了しました。」

「さて、訓練と言つたが、君は管理局の者ではないからね。僕は君の実力を見ておきたいんだ。君の支援能力は素晴らしいが、まだ個人での戦闘は見ていない」

「はい、分かりました。・・・未熟な僕がどこまで出来るか・・・」

「別に、すぐに決着をつけようとはしないさ。僕の力が君のためになつたら嬉しいけどね」

「そういうことですか。では・・・！」

以外にも、彼の方からの突撃で模擬戦闘が始まった。鞭による読み辛い連撃。

それを僕は魔法を使はず、回避とS2Uで受け流していた。やはりこのあたりはまだ素人のようだった。

まだまだ甘い。

S2Uで攻撃を受け流した後、反撃を加える。

「ぐう・・・！」

その反撃は、回避が間に合わずかすり、少し飛ばされる。

「無理に接近戦をしようとするな！あくまで自分に適した戦い方を心がけるんだ！」

「はいっ！」

それを聞いた遙は距離をとり、魔力スファイアを展開、4つの魔力弾と共に、再びこちらに向かってくる。

しかし先程とは違い、左手を伸ばし、魔法を発動させたようだ。

彼が得意としている、魔法の高速発動。

複数のチーンバインドがこちらに襲い掛かる。

右腕を狙った攻撃を、シールドを展開して弾く。

しかし、それを狙っていたのか今度は魔力弾が左から来る。

それを回避する。

おそらく、防御させて位置を固定させるのが彼の狙いなのだから。

ならば、直ぐに離れた方がいい。

一度距離をとり、こちらも射撃魔法で応戦する。

彼は訓練場を走り回りながら、魔力弾に直接角度を変えつつ放つだけなく、発射位置の角度も利用し、様々な方向から魔力弾が襲い掛かる。

妙だ。角度をつけるためだけに走り回っているのか？

既に彼の息は上がってしまっている。

「無理をしそぎじゃないのか？」

「はい、ここまでの量の魔法を使うのも……！戒めの鎖よ！」

「……なつ！？」

突然訓練スペース中に展開される魔方陣。
これを設置するために走り回っていたのか。

「いけえ！」

僕に襲い掛かる無数の鎖。

一つでも引っかかったら他の鎖に引っかかって終わりだらう。

恐らくは彼の最高の一撃。

そしてそれを回避しきるのは困難。

ならば - - - - -

「まだまだあツ！」

真正面からバリアを展開して防ぎきる！

幸いなのかひとつひとつ鎖に充てられた魔力量は少ない。それで
も恐ろしい量なのだが。

ガキインツ！

無数の鎖とバリアが衝突する。

それは長い時間だったが、終わりが訪れた。
消滅する鎖に防御魔法。

僕はかなりの魔力量を消費したが、まだ戦闘を続行出来る。

「・・・駄目でしたかつ・・・」

もつとも、彼は耐えられなかつたようだ。座り込んで肩で息をしている。

決着はついた。

「お疲れ様。とりあえず、あの量のバインドには驚いたぞ」

「長期戦は不利だと思つたんですね。・・・失敗でしたが

「いや、意表は突けると思う。しかし、やはり長期戦で相手の隙を探し出す闘い方も頭に入れておいていいと思うぞ」

「はい、分かりました」

「しかし、走つて魔法を設置する、といつのは驚いたな。ランクの高い魔道士ほど、魔法に頼りすぎてしまつものだが・・・」

「僕に魔道士ランクはありますんよ?」

「闘つてみる限りAランクに届くかもしれないと思ったがね。とりあえずは接近戦の練習をしてみてもいいかもしれないな」

「わかりました!ありがとうございました!」

ペコリと遙が頭を下げる。

「い、いや、別に、公式なものでもないのだからそんなに丁寧にならなくても・・・まあ、僕にも学べる所はあった。こちからも礼を言わせてもらひます

「はこつ・・・・・」

鬪つてみて分かった。

彼とはきっといい戦友のようだ、好敵手のようだ。
そんな関係になれる、- - -そつ、思った。

まつめのひとつでのたたかい（後書き）

「めんなさい、これ以上は長くなりますので一度切ります^_^

と、いう訳で戦闘オンラインでした。

ちょっと残念な出来でしょうか。

私は戦闘シーン苦手なんです！（大事

では、次回の更新も早く出来ると嬉しいです。

駄文を読んでいただきありがとうございました、お疲れさまでした。

現地協力者・ひめみやひやるか（前書き）

凄く・・・遅いです・・・。
本当に「めんなさい」。

理由としては、

環境ががが 思いつかない 複数回書き直し 漸く書き始める エ
ラーで文章の消失 泣 テイルズオブグレイセス ポケモン

おおよそこんな感じです（殴

そしてなんとこんなに時間かけておきながら今回も短いです（お前

「めんなさい」、ではどうですか。

追記

小説直投稿する時はサブタイトル記入は絶対に忘れるなよー。w（自
分に言い聞かせ

現地協力者・ひめみやひやるか

遥 side

「ここからは見えないけど日本では太陽が高い位置に昇つてきた頃。信じられない速度で、リンクティさんはさんど、僕となのはさんの色々と織り交ざったなんだかとてもすゞじ事情説明を高町家や学校で終えたあと、アースラの乗員さん達への自己紹介となつた。

「はい、では今日からしばらく地球でのロストロギア搜索・封印のお手伝いをしてもらう現地協力者を紹介します」

僕となのはさん、ゴーノさん、クロノさん、リンクティさん、母さんが並ぶ前にはたくさんの乗員さんが並んでいる。
き、緊張するう・・・。

「高町なのはです、よろしくお願ひしますつー」

「ゴーノ・スクライアです。よろしくお願ひします。」

・ 次々と自己紹介を終えていくなのはさんにゴーノさん。 ハラウ・

「ええつと、次は遥さんね。・・・顔色悪いけど、大丈夫?」

顔を覗き込んでくるリンクティさん。その柔らかな笑みは普段なら緊張も和らぐのに、じつじつと今は余計に固まってしまう。

「みんないい人達だ、安心して話すとこ」

「クロノくん、それあんまり励ましこなつてないの」

「は、はい・・・」

「こつまでも皆わんを待たせる訳にはいかない。

・・・行こう

「ひや、ひやうつーひやじめおして、ひめみやひやるかですつー・よ、よいかへおねがこつまじゅつー・?」

・・・・・ほわわーつ

見事に嘔んでしまいました。皆さんのその温かい視線やめてください
いいいっ！？

二口二口したり息が荒くなったりなんだか乗員さんの統制が崩
れて怖いです。

なのはさんやリンゴイさんエイミイさん、母さんま二口二口している
し、ゴーノさんとクロノさんは頭を痛そうにしてる。

・・・・・じつよつ、視界が滲んできたよ・・・

なのは side

遥くん可愛すぎなの。

瞬時にレイジングハートに映像の保存を頼んでおいて正解だったの。
その涙田がさらに可愛いの……！

田の前では今和みに和んだ空氣をクロノくんがビビリかしそうとしているのに、リンディさんや薰さんを含めた乗員さんの多くが盛り上がりてしまつてなんだか落ち着くにはすぐく時間がかかりそうなの。

あ、とうとう女性の乗員さんが遙くんを抱き寄せちやつたの。う、羨ましくなんかないの。

遙くん大人気なの。とつかえひつかえに撫でられたり抱きつかれたりで遙くんが田を回しちやつてるの……。
なんだか私もうずうずしてきた……。

・・・あ、とうとうクロノくんがデバイス取り出しつて強引に遙くんを引き離したの。
遙くんが抱きついて泣き出しあやつてみんなから冷たすぎる視線を受けている。

「血口紹介は以上一艦長も薫執務官もこい加減にしてやること一

「あらクロノくん、もつもしあつもつしてこじやなー……

」

やつ言いながらも次へ言い進めるリンディさん。

・・・・・の田から遙くんはアースラ艦内では「ひやるかりやん」と呼ばれるよくなつたみたいなの。

「もう止めよ！」フェイトー管理局が本格的に動いたら勝ち目はないよ！」

「でも・・・私は・・・ジュエルシードを集めなきゃ・・・」

「あんな鬼婆に構うことなんてないんだよー！」フェイトはもう十分頑張った！

「ありがとうアルフ・・・。でも、集めなきゃいけないんだ。絶対に」

「フェイト・・・」

暗い浴室。

アルフが止めようつて言つてくれるのは私のことを心配してくれているからで、それはとても嬉しい。

でも・・・ジュエルシードは集めなくちゃいけないんだ。母さんのために。

「・・・遙・・・もし、遙、それにはあの友達になりたいって言つてた白い子と一緒にジュエルシードを集められたら。きつと、母さんの願いはすぐに叶う。でも、それは出来ない。

私たちがやっているのは、決して周りには正しいとは言われないとなのだから。

また立ち塞がつても、今度は私は負けない。

現地協力者・ひめみやひやるか（後書き）

文章残念で短いけど今は「これ以上は無理です」めんなさい。

最後の部分は暗めですが、最後は一気に明るくしたい予定なのであります。

ひやるか「どうしてあんなに躊躇されたの？…それに名前を元に戻して…」

センスの悪い私が出来る精一杯のネタです。

ひやるか「いろいろからつ…？」

駄文短文ですが、読んでいただきありがとうございました！

ひやるか「無視しないでええつ…」

魔法の訓練と重量を感じさせない幼女♪（前書き）

試験も終わりましたのでそろそろ執筆したい、といつゝと。当小説では全員生きて帰るうーがテーマです（なんじやそりや

・・・なのですが、『おとぎ話』や『ファンタジア』家を・・・つて感じです。

もつ遅い氣がしなくもないですが、チート能力による『都合展開』が苦手な方は逃げてくださいね

では、どうぞ。

魔法の訓練と重量を感じさせない幼女と。

遥 side

あの絶対に思い出したくない日から数日。

僕となのはさんはアースラで学校での自習をしたり魔法の勉強や練習をしたりしつつジュエルシードの探索、回収に協力していた。

何せここは地球より何十倍も魔法文化が発達している。と言つても地球に魔法文化はないようなものなのだが。

歴史の教科書の端に載つている呪術や儀式がもし魔法だったとしてもだ。

ミッドチルダの魔法が浸透しきつた文化とは違うのだ。

・・・話が逸れてしまつたが、この艦内には戦闘用の魔法に特化した人、クロノさんがいるのだ。

実戦と勘に任せて成長していた部分が多いので、ちゃんとした基本が教わる事ができるのはとても嬉しい。

と、いうことで。

「さて・・・魔力の流れは安定しているな。遙、長時間一定量の魔力で魔法を行使するのは魔法の安定化を図ると共に、長時間の魔法の行使への第一歩となる」

「はい・・・クロノさん!」

展開した4個の魔力スフィアを回したり消したり数を戻したりしつつも可能な限り魔力の流れを安定させる。

「ここまでは順調だな・・・本当に素人なのか・・・？」

クロノさんが何か呟いたようだったが集中している僕には聞こえなかつた。

『ひや、ひやうつ！ ひやじめまして、ひめみやひやるかですっ！ よ、よろしくおねがいしましゅつ！？』

「うわああああああつ！？」

ばしゃばしゃばしゃう！

突然の記憶から早急に消し去るべきである音声が聞こえ、暴走した魔力が多数の魔力スフィアを生み出し、飛んでいく。

「・・・訓練の途中なんだがね。」

咄嗟にシールドを展開したクロノさんが言つ。

「だ、駄目だよレイジングハート！ そんなことしちゃう！」

『マスターが訓練所の入り口で「遙くんの独り占めは許せないの・・・！」と仰つてましたのでつい』

「それとこれとだと話は違うの？！」

最近妙に人間らしくなったデバイス・レイジングハートさんの音声を聞きつつ、僕とクロノさんがため息をつく。

・・・とこりうか、なのはさんの物真似上手だな。

「そりながら声を掛けてくれればよかつたんだが・・・まあいい、遙、今日の訓練はここまでいいか？」

「はい、今日もありがとうございました！」

ペコリと頭をねが、

「さて、レイジングハートさん。・・・何故それを？」

『薫執務官からの咄嗟の指示です。既にアースラ乗員全員へのデータ送信が完了しています』

「・・・・・一撃で終わらせるつー！」

「えつー?ちよ、ちよつと、遙くんつー?」

「ディバイイーン・・・・・」

魔力が漲る。この手で呪われた歴史を修正するんだ！

「ヤレ」までだ遙

「うひやつー?」

クロノさんにバインドを張られて魔法が止まる。もうすこしだったんだけど・・・。

「全く、お前は砲撃魔法に適正が無かつたんじゃなかつたのか・・・？それとレイジングハート、お前もだ。無闇やたらに人の嫌がる事をするもんじやない」

『以後気をつけると思います』

全然反省しないよね、それ・・・。

それにもしても、何故砲撃魔法が撃てそうだつたんだろう？よくなのはさんの砲撃を見ていたからかな？

それを話したら実戦で伸びるタイプか・・・とか私の魔法・・・となるのはさんとクロノさんが複雑そうな表情をしていたが。

そんな時・・・

ビーッ！ビーッ！

「警報つ！？」

「艦橋に急げ！」

短いやりとりの後、僕らは艦橋に急ぐ。

「エイミィ、状況はつ！？」

到着した後、クロノさんが既にオペレーター席に座っていたエイミイさんに状況を聞く。

「例の魔道師達が動き始めたよ！海上で強大な魔力反応！多分強引にジュエルシードを起動させた！」

そして暴走を始めたジュエルシードと戦闘を始めたフェイトさんとアルフさんの様子がモニターに映し出される。

「フェイトちやんっ！？」

「なんて無謀なことを・・・」

ジュエルシードを数、6つ。

回収を急いでいるのか・・・？

「私達も助けに行かなきやつ！」

なのはさんの声。

しかしそれをクロノさんが制す。

「待つんだ。あれでは放つておいても勝手に自滅するかかなり削られる。待つた方が得策だ」

「で、でも・・・」

「私達にはジュエルシードを回収する義務があります。そのためにはこのよつな判断をすることもあります。辛いでしょうが、我慢してください」

艦長であるコンディさん止められてしまひつぱりもない。僕も助けには行きたいけど···

そんな時。

(転送ゲートは僕が開いた！2人とも、急いで！)

ユーノさんの声が念話で聞こえる。

「わわわ、転送ゲートが開かれたつ！えええつ！？

パニックを起こしてゐるハイミヤさん心中で謝りつつ、

「いみんなさー、お叱りは後で受けます！行こ、遙くさつ！

なのはさんが僕の手を引つ張る。

「わわつ！？

「待つ···つって言つても聞かないか···」

諦めたようなクロノさんの声を聞きつつ、僕らは艦橋を後にした。

そして、今は転送ゲートの目の前にいるわけだが。

「その、僕飛べないんですが···」

正確には飛べるが、とても戦闘できる状態ではないのだ。

「大丈夫なの！」

そう言って何故か僕の背中と膝裏に手を回した後、僕を正面に抱き上げた。

「わわっ！？このままいくつもりですか！？」

暴れるが、やつぱり全くビクともしない。

「大丈夫、遙くんなら全然重たくないのっ！」

「そういう問題じゃないですっ！戦闘の様子はモニターされるんですよ！？」

「それがどうかしたの？」

「・・・そうですか」

観念して体の力を抜く。

「転送、行くよっ！」

ユーノさんも乗り込み、ゲートが光に包まれる。

・・・あ、目、閉じてなかつた・・・

強烈な光に襲われ、身悶えていた後、強烈な重力を感じた後、なのはさんに揺すられて目を開く。

既になのはさんはバリアジャケットを身に纏っている。

魔力反応によりシールウィップもバリアジャケットを展開したようだ。

正面の方向、その少し遠くには、何故か驚愕の表情に染まったフェイトさんが。

「遙・・・なにをしてこるの？」

目からりとてつもない寒気を感じるが、とりあえずは。

「話は後ですっ！-とりあえずはジュエルシードの封印をつ！」

「3人でぴったり頑張ろっ！」

僕なのはさんに抱かれたままなんだけどぴったり1人分やるんだ・。

フェイトさんの冷たい視線は相変わらずなのはさんを貫いてしたが、とりあえずはジュエルシードに向かっていったのを確認し、僕らも封印にとりかかった。

魔法の訓練と重量を感じさせない幼女と。（後書き）

サブタイトルはヤケになつてつけました。
後悔なんて・・・してないんだからねつ！

さて、迷走しつつありますが投稿です。

次回は遙を争つて2人の魔法少女の争いが・・・

遙「止めてえつ！？」

さて、次回の更新は早くできたら嬉しいです。
駄文ですが読んでいただきありがとうございました、お疲れ様で
した。

遙「人の話を聞けええええつ！？」

重量なんて無いんです（前書き）

1ヶ月ぶりの更新とか嘘だろ・・・?
家のPCが機能しなくなつてから数週間、今回あたりから携帯も使
いつつの投稿となりますので多分短くなります、ごめんなさい。

では、どうぞ。

重量なんて無いんです

遥 side

・・・魔法の術式を組み上げ、発動する。

なのはさんに抱きかかえられたままではあるものの、魔法の発動とコントロールに集中することが出来たので、次々と魔力弾を放ち、暴走しているジュエルシーードに命中させる。

僕には砲撃魔法などの威力の高い魔法は使えないのに、魔力弾や拘束系の魔法でジュエルシーードの動きを止める。

高い威力を持つ魔法が使えるなのはさんとフロイトさんのための時間稼ぎ、ということだ。

「なのはさん、フロイトさんっ！」

「うん、行けるっ！」

なのはさんの力強い返事を受け、準備が完了しているのだと理解する。

フロイトさんの方も既にバルティッシュさんをジュエルシーードに向け、魔力が先端に集中している。こちらも準備完了なのだろう。

「行くよ、フロイトちやんっ！」

「・・・つる」

強力な魔力反応を間近で感じる。
その瞬間、2発の魔力砲撃が6つ全てのジュエルシードに命中し、
一気に封印される。

「・・・ジュエルシードの封印は終わった。次は、フェイトさんだ。
なのはさんは交戦する度にフェイトさんを気にしている。
やはり、何か感じる何かがあるのだろう。」

「・・・フェイトちゃん」

なのはさんがフェイトさんの方を向く。

「・・・友達に、なりたいんだ」

静かに、しかし力強い言葉でフェイトさんに伝える。

「理由は、分からなによ。でも、もしかしたら手伝える事があるかもしねない」

心優しい子なんだ。

何度も戦つた。

何度も突き放した。

それでもやつぱり、彼女の心は優しくて、力強いんだ。

遙が抱きかかえられたまま出てきたときはびっくりしたけど、よく考えたら遙は飛べなかつた気がする。

友達。

なれば、きっと、早いペースでジュエルシードを集められぬし、
彼女や遙とも一緒にいられる。

アルフと彼女の使い魔も入れて5人。きっと温かいのだろう。

「駄目だフェイイトつ！目的を忘れたのかいつ！？」

----- そうだった。

それでは管理局側にジュエルシードを持つてかれてしまう。
それじゃあダメなんだ。

母さんの、願いを果たせない。
だから。

静かにバルディッシュを構える。

彼女は一瞬悲しそうな表情をしたけれど、すぐに決心した顔になつた。

----- 本当に、強くなつたと思う。

技術も心も、初めて出会つたあの頃とは大違つた。

「行くよ、バルディッシュ」

『はい、行きましょう』

バルディッシュュからの力強い返事。

そんな時だった。

『マスター、上空から極めて強力な魔力反応。次元攻撃だと思われます』

気がついたときにはもう遅かった。

どこか懐かしい紫の雷に体を打たれ、

「母、さん・・・」

私は意識を手放した。

遙 side

突然の次元攻撃。

かなりの短時間でここまで威力が出るのだからかなりの魔導師だらう。

咄嗟にプロテクションを開き、防ごうとする。

このままではなのはさんにも当たってしまう。

「う・・・・強い・・・・！」

しかし魔法の威力はかなりのもので、僕は耐え切れず衝撃を受け、下に落下してしまつ。

見えるのは、緊急で出撃したクロノさんとアルフさんが3つづつのジユエルシードを確保し、フェイトさんを脇に抱えたアルフさんが、こつちに・・・いぢに?

「2度も悪いけど、やつぱりワイトにはアンタが必要なんだよ」

そんなどこか優しいアルフさんの声を聞き、僕は意識を落とした。

重量なんて無いんです（後書き）

・・・2度目のフロイトサイドへの移動です。

「めでなさい、でもエントライングを考えるヒツイなこと（あああ

ひつやしふりの更新ですねえ。

本当に申し訳ないです・・・。

次回からは携帯からの更新をする努力をしてみます。

次は1か月更新なんて残念な真似はしない！・・・と黙つ（（

ではここまで読んでいただきありがとうございました、駄文すみませんでした、お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6819m/>

魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

2010年11月12日07時20分発行